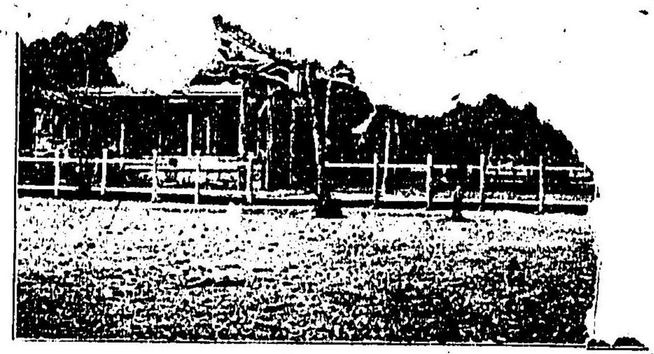
偉人黒住宗忠

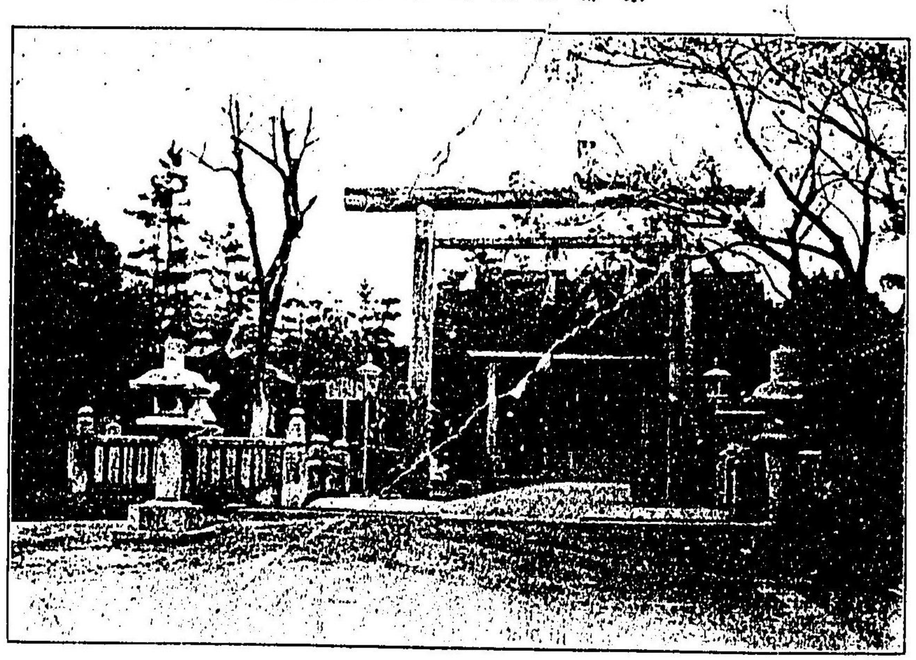
文學士 木山熊次郎 著

內外教育評論社

41. 5. 16
內交



京都神樂岡崇忠神社



社神忠崇山岡前備

代序

拜啓愈御高著「黒住宗忠」御出版之由。誠に愉快に相覺申候。凡そ宗教は虚心坦懐、以て之を信奉するは易く、鴻荒を開拓し　が基礎を作るは難し。黒住宗忠の教は、固より神道と雖も、而も亦自ら特異なる一派を成すものなり。

[illegible]に古人の足迹を辿るが如きことをなさずして、始[illegible]足迹を荒漠の野に印せしものなり。此れに由りて之[illegible]勸れば、彼れも亦精神界の一偉人と謂はざるべからず。治の今日となりては、佛教と儒教とを問はず、古代の教權、くは勢力を失ひ、新に輸入されたる基督教も十分[illegible]力を

なく、我精神界は、一時混沌の狀態を呈するの觀
す。此時に當りて快刀亂麻を斷ち、以て後生を
する所を知らしめざるべからず。然れども何
づること能はず。衆皆相見て趦趄逡巡、依然
佛教若くは基督教等を信奉し、千古鑿空の大
[illegible]。果して然らば遺憾此上なし
或[illegible]不可能の事に
れ固より至[illegible]違なしと雖も、決して不可能
[illegible]らず。黑住宗忠曾て[illegible]模に於て之を成せり。
[illegible]の今日に於て豈に大規模に於て之を成すべからずと
せんや。試に精神界の一偉入黑住宗忠の事蹟に就いて之

を徵せば、思、半に過ぎるものあらん。余は御高著の我邦今
日の精神界に貢献する所少からざるを疑はず候。依つて
茲に所感を述べて、序文に代へ申候。匆々不宣。

五月四日夜

井上哲次郎

木山熊次郎様

代序

偉入黑住宗

住宗忠序

[illegible]來訪せられて「偉人黑住宗忠」を出版するにつき、以[illegible]が、雜誌日本宗教に掲載せし「黑住宗忠の宗教思想」が、[illegible]に鼓舞を與へたといふ因緣より、且つは黑住教々祖としてのみ知られて居るが、事實偉大[illegible]介するに當り、余の所感を述べて貰ひたいとの事である。余は先年宗忠の思想を研究し、彼を立派なる一宗教家と許し、今度渡英して出席する宗教大會に於ても、講演の一部に、彼の思想を紹介して、我國民の宗教思想を述べる一參考として見たいと思つ

て居る次第である。序を求められて、同君の原稿を精讀する暇無きは、殘念であるが、研究が宗忠を各方面より觀察したると。同君が大學卒業の時の論文の一部分なるより、一夜漬の書にあらざるを信じ、宗忠の偉大なる點、二三を擧げて序に代えようと思ふ。

一。宗忠の思想の由來等に就ては、尙明瞭せぬ所があるが、彼は兎に角、大なる物を握つた人格である。彼の書翰や歌を見、また其行動を觀ると、彼が此天地の根底となる或物を捉へた活人であることは疑ふ事は出來ぬ。

二。而して、此大なる物を捉へた彼は、之を說くに些の書物臭き所なく、其の大道を、平易簡單に日常、眼前の事物に就て

明した。例令へば、天地の大道を、米搗きに譬へて説く類とは、實に面白くて、此點に於ても彼は立派なる、宗教家説

彼はまたインスピレーションの權化である。彼は數十年の生涯を通じ、常に熱烈至誠で、講壇に上るや、毎時でも神懸つて語らしめたる趣がある。病氣であつても、一度壇に上れば、感興涌きて、別人なるが如き、實に中々眞似の出來ぬ事である。

四。彼の奇蹟が、また彼のだ……なる事を示す。彼は禁厭をやつたが、彼の禁厭は、普通の禁厭者流が試みるものとは選を異にする。彼の禁厭は禁厭其物が目的でなくして、病者

に對する滿腔の慈悲同情のみより來て居る樣である。彼は禁厭は「まじりない」即ち純潔無垢といふて居る。余は彼の禁厭の施し方をみて、彼の益々大なる人物なるを思ひ、其根本の精神に對して敬意を表せざるを得ない。

五。次に、彼が人世社會を觀じて、過去や未來のみを見ないで、直ちに現在を認めて、人々が神を認むれば、現世が神の世だと言へるは確に卓見で、これでこそ、彼の宗教思想が健全なりしと斷言することが出來る。

尙彼の思想の特異の點を擧げたらば、面白き節も多く、また彼の思想の調和しない、明瞭しない點もあるが、彼は遂に、一個の立派なる宗教家、偉大なる人格たるには相違ない。ま

ば、彼の神道が、眞の歴史的神道の本旨なりや否や。また黒住教に未來ありや否や。黒住教徒が、天照大神を認めなと説いた彼の主旨を正當に理解し居るや否や。彼にネなく、パウロなきを悲む事なぞ、擧ぐべき事もあるが、必ずしも今言ふ必要はない。兎に角、宗忠が偉大なる人格であることは、余は十分之を認め、君が隱されたる此偉人を紹介するは面白いと思ふ。殊に信徒としてならずして學究的に彼を記述し、彼の思想を分析して紹介するは一層面白いと思ふ。來月上旬渡英の船中に於て、君の書を讀み、宗教大會に於ける講演の參考にしたい。何分にも寸暇なく、自から筆を執つて序文を書く能はざるを殘念と思ふが、以

上の點は自分も認める所であるから、採つて序に代えられて苦しくない。（文責在著者）

四十一年四月廿日　海老名彈正

偉人黒住宗忠序

拝啓不順勝ちの候、益々御勇健奉賀候。陳者今回の貴著は時節柄至極適切の御英擧と敬服致候。小生に、何か一筆を試みよとの御懇命を被り候處、小生は、別段黒住教を研究したと申す譯にては無之、自然に本教に入門するやうに相成候までにて、追懐すれば二十七八年戰役の前年、長病の愚妻が醫家に見離されんとして速に本復に就きしも。數年を經て大阪府第五尋常中學校長拝命の翌年、小生自身も同じく醫家の大厄介物と爲らんとし、忽ち心機の一轉を來たせしも。將又爾來全家の無病息災、以て今日に至り候も、偏に

本教の御蔭に外ならずと、深く感銘罷在候。右様の次第に候へば、現に信徒の一人なる小生に向つて、黒住教は、抑も何處に妙味があるかと問ふは、恰も年來の喫煙家を捕へて、煙草は何處に甘味があるかと詰るに異ならず、頗る返答に當惑致候。只心に浮み出で候まゝ申上げんに、老若男女を問はず、貴賤雅俗を論ぜず、誰れにも極めて實踐し易きが、本教の本教たる所以に可有之歟。多々倍々複雜世態に處し、自由自在に簡易生活を營み得らるゝが、本教の本教たる所以に可有之歟。愈々嚙み絞むれば、愈々何等の厭味だも感ぜざるが、本教の本教たる所以に可有之歟。若夫れ、少生の本教を奉ずるに至りし遠因は、宗教觀にてもなく、哲學觀にて

なく、全く少年時代の小生を洋學界に手引きし呉れし東
原宣乗と云ふ良教員其人の感化に在りと御承知被下度候。
りに臨み、尚一言申添へ候。黒住教前途發展の餘地如何
二十七八年戦役より凱旋早々、東郷大將の大勲參拜の
事にて之れを下し得るに餘りありと被存候。頓首
明治四十一年四月末皇室御慶事の當日

無厄樓主人　福井彦次郎謹白

偉人黒住宗忠序

黒住宗忠は比較的に世に識られざる偉人なり。彼は備
前岡山に生れ、田舎神主として一生を終れり。彼の期せし
所、恐くは、京洛の地に出でゝ、道の爲に花々しく活動するに
あらずして、其教旨及徳化が近郷よりして自然に天下に普
及するにありき。要するに彼は手の人にあらずして寧ろ
心の人なり。かるが故に、名聲天下に喧しきに至らずして
終れり。然れども名の顯るゝと否とは必しも其人格の大小
と一致せず。黒住宗忠の如きは、終生田舎神主たりしと雖
も、其人格の圓満にして偉大なる、其教理の平易にして卓抜

る、嗚に幕末の偉人として天下に紹介するに足る。予が家代々黒住教信徒たり。予若年の時より、黒住教及其の教祖宗忠の名は旦夕之を耳にせり。後、業を大學に學ぶに當りて、予が腦裡に印せる黒住教の、宗教としての價値及其教祖の人格如何の疑問起り、爾來、是に向つて多少の研鑽を重ねたりき。而して其結果は、黒住教が宗教として多大の注目を價ひし、其教祖の人格の偉大なることを發見するに至れり』

此の如き偉人を天下に紹介するは、正に學者の任務たり。曩に大阪朝日新聞記者牧放浪君の「黒住宗忠傳」あり、繼て予が同姓無堂君の「黒住教祖の宗教」の著あり。一は朝日新聞

紙上に、一は中國民報に連載せられ、共に關西地方の喝采を博せしものなり。今又學友木山君「偉人黒住宗忠」を著す。披いて之を見るに、行文明快、所論穩當、隱れたる偉人の風貌を傳へて餘蘊なし。宗教、倫理の問題喧しき今日、此の如きの好著を得たるは、大に喜ぶべきの事たり。聊か所感を述べて以て序となす。

明治四十一年五月六日

文學士　桑田芳藏識

自序

本研究の成るは、明治三十七年七月、余が東京文科大學卒業前數ヶ月にあり。當時、余、井上教授の「日本朱子學派の哲學」の講に侍し、傍ら氏が、陽明學派、古學派の哲學の著書を窺ひ。更に、我國宗教の開展を觀ぜし時、國民思想發展史の研究に興趣を感じ、國民性の攻竅に對する感興勃々たるを覺えたり。隨つて、多くの學者が未だ顧みざる、又は顧みるも、其研究殊に不十分なる日本神道史の探求を必要とし、併せて、多くの士が觀て以て、迷信教となす神道諸派の研究の、我國民性の闡明上よりも、我社會政策上よりも、又思想界の活問題

として、面白きを感ぜり。即ち井上教授に提出する論文として、幕末神道の系統を以てせんとせしが、其全部を果す能はず、其中に於て世人の洽く知らず、學者宗教家も多く看却せりとなせるより、最も力を盡して研究せしもの本研究なり。本書成るの因由斯くの如し。

而して、余が黒住宗忠の研究を思ひ立ちしに就ては、友人黒住宗武君が、虚心怛懐些の秘なく、蔽なく、黒住教廳に於て公刊せる印刷書類の外、重要にして價値ある文書の借覽を許さるゝあり。且つ一切の宗教に對して、熱烈なる同情を注ぐ能はず、時に冷酷なる批評を試みんとする著者に對して、自由なる研究批評を甘諾されしに由らずんば非ず。」若し

それ黒住宗忠を奉祠せる社殿は、岡山市を西に距る半里余が郷地より東四里、輪奐たる堂宇、壯嚴なる境地、余が岡山中學にあるの時は屢々其傍を過ぎ、毎に、『宗忠とは何人ぞ』の念切なるを禁ずる能はざらしめしものなり。又同祠祭日の時の如き、山鐵線は特に臨時列車を出し、余が郷地の近邊よりは、大元様に參詣すと稱し、數十百人伍をなし、遠地より或は數千人の隊を成して來るものあるは、また余の屢々目撃せし所なり、『宗忠とは何人ぞ』、これ余の常に疑問とせざるを得ざりし所なり』』其後、余は基督教界の碩學海老名彈正氏が、黒住宗忠を以て偉大なる宗教家なりと論ぜし文を讀み、姉崎博士の如きも、亦宗忠を以て偉大にして熱烈な

る神道家をなすを聞けり。余が本研究を試むるに至りし動因は、斯くの如き者なり。

然しとも、本研究は、未だ不完全極まるを免れず。徳行家たり宗教家たる宗忠は、自己の宗教観をば、系統を立てゝ論述せさりしなり。今日門徒が傳ふる傳説に就ては、其由來に就て十分なる探求判斷を要する者多く、輕々に信據す可からざる者も尠からず。從つて、彼が人に與へて道を論じたる書簡の斷片と、折に觸れての歌詠を主とし、更に確實なりと信ずべき徳行一般のみを骨子とせるものが、未だ不十分なるを免れざるは當然なり。且つ本書の大部分は、前述の如く數年前の研究にかゝり、當時他の論文製作にも忙しき

の時を以てし、根本には、著者の鈍腦を以てせることとなれば、眞に論ずるに足らざらん。今出版するに際しては、多少の修正を加へ、改訂を試みしと雖も、亦以て大體を推すべきのみ。全體人物の研究は、容易なるが如くにして、難事中の難事なり。自から主人公と同情同感化するか、然らずんば、一切の事實探索に於て寸毫の遺漏なきを期せざる可からず。而して著者の現境涯は二者共に之を許さゝるなり。然るに此罪をも犯して尚本書を出して世に問はんとするは、左の如き理由によるにあらずんば非ず。

一。本研究もとより見るに足らざらんも、一夜作りの書にあらず。多少は眞面目なる研究の餘に出で、黒住宗忠を

自序

世に紹介するに於て利益なくんば非ざるを信ず。若し採るべき者ありとすれば、著者が主觀的議論を避け、事實の公平なる判斷を試みんとせしは、彼を傳へて比較的に過誤尠なきを得たらん乎。

著者の研究によれば、如何に之を貶せんとするも、宗忠の思想は、我宗教史上に於て沒却し了るべきものに非ず、其德行、人格、感化に至つては、眞に大なる者あり。吾人は兎に角、一偉人として、之を紹介するの義務あるを認む。

若し夫れ、宗忠を教祖とする黒住教が、迷信教の一派と見做さるゝあらば、宗忠の旨を奉ずる者、末節に走るか、

世の誤解を買ふべき行動あるが、又は、宗教研究家が、直ちに宗忠の思想人物を見ざるに因由す。黒住教の爲めにも、黒住教の存在を許せる我社會の爲にも、又學者宗教家の爲にも、之を惜まざるを得ず。

偉人の研究は、研究者をして偉人たるに一歩を近けしむ。而して、其國民中に偉人あるを認識するは、國民的自覺を喚起し、又は之を強からしむるに大なる功果あり。近時、我思想界が、偉人の研究を志し來り、殊に、我國の偉人の研究に興味を感ずること切なるは、好風潮といはざるを得ず。此時に際して、多くの人、殊に青年學徒にとつて未知の一偉人たる宗忠を、其一員に列せし

むるは、また可ならずや。

一、更に如何に拙悪なる書と雖も、著者が多少の骨折を試みじものを公にして、世人の是正を聞き、示教を仰がんことを、著者の私情として希望する所ならずんば非ず。聞くが如くば、黒住教派に於ては、近時教規を改正し、又新進有爲の士を集め、宗忠本統の旨を發揮して、人心鼓舞作進の任を發揮するに一層の努力を以てせんとすと。知らず、本書は、同教にとつて、利たるべきか、失たるべきか。之を以て序となす。

明治四十一年五月上旬

著者識

一、黒住宗忠の生涯は、單調にして奇蹟なし。彼は、生ける時に、既に多くの人に尊敬せられ、宗教家殊に開祖などに通有なる迫害を受けざりき。斯る事象は、彼れ自身の穩健なる人格性行と相待ちて事蹟を晦ます上に、筆をして面白からしむる能はずして、著者の惡文をして一層無味乾燥ならしめたり。

一、全躰の結構は、初めに事蹟の一般を述べて、彼が如何なる人なりしかを紹介し、次に彼の思想を說明し進んで、此思想を懷ける彼を、宗教家として見れば如何と觀察し、補遺として逸事餘聞を加へ、更に附錄に彼の啄章及書翰を附加して彼れの全面目を發揮せんと努めたり。

即ち章の分ち方に就て、些か意を用ゐたる積なり。其是否の如きは讀者の高敎を仰がんと欲する所なり。

一、本書冠して偉人黒住宗忠としたり。たゞ黒住宗忠とのみしても可

例言

なる事なるが、既に牧放浪氏の「黒住宗忠」ある事なれば、之と區別せん爲めに偉人と冠せり。尚著者が、本書を公にする以上は彼を以て偉人となし、其紹介を無益となさゞるは多言を要せざる可し。されど言ふまでもなく、偉人といひたりとて、著者が彼を以て、最も崇仰する の人となす勿れ。著者は、各方面に渉りて、兎に角傑出し非凡なる人には何人にも偉人てふ尊稱を献げんと欲するものなり。

一、本書の叙述は、全躰に學究的に走れり。殊に第三章第一第二の如き必ずしも無くてかなはぬものに非ず。讀者、たゞ宗忠の一般を解せんとのみならば、第二章及第三章の第一、第二第四章の如きは、省略するも可なるべし。

一、宗忠の詠歌書翰を引證せる者には、今の口振よりは頗るをかしくまだ、語法の誤まらずやと思ふものもあれど、徒に改竄を加へんは不可なりと思ひて其儘になしたり。

一、本書巻頭に掲ぐる宗忠の肖像以下の寫眞は、黒住宗子氏の惠贈せらるゝ所、深謝に堪えず。尚、附錄に掲ぐる宗忠の詠草書翰抄は、黒住教に於て、宗忠の思想を表はすに、最も適當なる者なりとして、印刷に附して、信徒其他に配付するものなり。之を本書に掲載するを許されしこと、また深謝に堪えず。

一、最近黒住宗忠に關する著述の表はるゝもの三種、一つは畏敬する先進牧放浪氏の黒住宗忠にして、他は桑田無堂氏の黒住教祖の宗教なり、前者は流麗暢達の筆を以て、主として宗忠の事蹟人物を紹介せるもの、後者は、宗忠を信仰する著者が、將來の文明的宗教として黒住教を推すもの、著者の倫理宗教上の根據より論述して、宜肯すべき節尠なしとせず。共に尊重すべきものたるは勿論なり。

一、本書を出版せんとして草稿を訂正するや、前記諸氏の著及び新材料に因つて益する所尠からず。牧氏の著の如き、吾人を利するや大な

例言

り。殊に本書に逸事餘聞の一章を加ふるに當りては氏の著に負ふ所最も大なり。中には其旨を附記して氏の文を其儘に拜借せる所あり。余の四月上旬大阪に赴くや氏を大阪朝日新聞社に訪ひしが氏既に南清に赴くの途に上り、本書の結構に關する氏の是正を仰ぎ及び氏の書より引用するの許可を得る能はざりしを憾とす。茲に此旨を附記して、氏に感謝を表す。尚、本書の如き學究的叙述を好まざる人は、必ず氏の著を讀まれよ。一讀卷を終るを知らざらしむる筆致と、學識深き氏の觀察は、宗忠の面目を活躍せしめて本書に勝る數十等なり。

一、本書出版に際して、井上博士は書翰を給はり、海老名彈正氏は本書の爲めに宗忠の偉大なる點を擧げられ、同教の信者たる大阪高等商業學校長福井彦次郎氏は懇切なる書面をたまはれり。更に文學士桑田芳藏氏も激勵の辭をたまへり。深謝に堪えざる所なり。

偉人黑住宗忠目次

第一章　事蹟……一
一　略傳……一
二　學殖……二
三　人物感化……二
四　重なる教弟子……
五　年譜……
第二章　研究の資料……
第三章　思想……
一　記述の方法に就

目次

目次

二　彼れの思想の由
三　世界觀……
四　人生觀……
五　心身の相關……
六　神人合一の意識
七　彼れの神世……
八　四海同胞主義……
九　彼れの神道……七三
附　彼れの國躰觀……日の神の觀念
十　信心の觀念……八〇
十一　實踐的教說……八四

二　誠を取外すな……活物を捉へよ……陽氣に
一　なれ……我を離れよ……に任せよ……
養心養氣の法
十二　對他宗教態度……一〇〇

第四章　彼れの思想の傾向……一〇二

一　彼れの思想は人生其物に對する大[illegible]
出てざりしが如し……二　彼れ
獨創的天啓的なり……三　現
彼れの思想は宗教
ふべきなり……
……
易なり……

目次

目次

第五章　宗
一　大自然
二　信仰の
三　學者に對
四　雄大なる抱負……
第六章　逸事餘聞……
第七章　黑住教史……

附錄

一　宗忠の咏歌廿九首……一六四
二　宗忠の論道書翰……一六九

偉人黑住宗忠

文學士　木山熊次郎著

第一章　事蹟

略傳

黑住宗忠は、右源次と稱し、左京と名詮る。姓は藤原氏、安永九年十一月廿六日(皇紀二四四〇年西紀千七八〇年冬至一陽來復の時を以て、備前國御津郡中野村に生る。父は宗繁、母は長瀨氏イク子と云ふ。家世々今村宮(備前御津郡にあり)の神官たり。宗繁四男あり、長は天し、次は猪平治といひ、幼にして棄放磊落、劍を學びて技大に進み、氣を負ふて武者修行に出て、江戸に來り、

名ありしが、懦慢不遜遂に厭怨を買ふて毒殺されしと傳へらる。宗忠は實に末子なり。

宗忠、天性正直、父母に事へて至孝なり。彼れ十歳の頃、一日一脚に木履を穿ち、他に雪駄をはきて外に使す、里人怪み問ふ、何が故に此くの如きかと、彼れ答へて言はく、余使して外に出でんとす、母君言はく、雪駄を穿ちて行かば可ならん、嚴君は言はく、木履にて行けと。其何れに從ふべきかを知らず、故に然りと。愚直なるが如きの裡、惋容父母の命に惟れ從はんとする至情を見るべきなり。彼れ幼にして謂へらく、天下に名を揚げ、世人に尊崇せらるゝの人となる、これ孝の最も大なるものなりと。十五六歳の頃、一日突然問ふて言はく「神になるには如何にせば可なるや」と、傍人之に答ふるものなかりきといふ。廿餘歳の比、一日感得す「心に惡き事と知りながら身に行ふ事なき樣にせば神とならるべし」と。これより毎事自か

ら反省して、心に惡となす事を爲さゞる樣修養頗る勉めしといふ。此頃彼れ、書道を時の岡山藩中の名家一森某に學ぶの外は、專ら父に從ふて神官の職をつとめしが如し。而して至孝の名は既に高く、頗る鄕黨の敬慕する所たりしといふ。

文化九年、彼三十三歳の秋、父母痢疾にかゝり、僅かに旬日を距てて逝きしかば、彼れ悲痛窮なく、慟哭其極に達し、儕々として樂しまず。遂に肺疾に犯され、翌十年十月十九日に至りては、全く床に就き十一年正月十九日は、病最も甚だしく、醫療百方手を盡すも、其効なからんし、時の藩の名醫浦田某又回復の望なきを述べ、同村懇知小野新兵衛なる者、亦其師呑計の占方凶なるを告げ、一家一門皆回復の望なきを念せり。宗忠も勿論心裏に天命を覺悟し、死を決して謂へらく「吾死なば神となりて世人の疾を治し得させん」と。遂に今生の永訣に平生尊信する太陽を拜し、天神地祇祖先考妣を拜し、

家人近親知己を集め、在世の恩頼を謝し、從容として死をまつ。此の間彼また思惟べらく吾元來父母の死を哀みて心を傷め、陰氣になりしより大病になりたれば、面白く樂しく、思ひかへして、心を養なひ、心だに陽氣になるならば、病は自から癒ゆべきものならん。此の身は、父母の遺躰なり、遺躰を惱ますは不孝これより甚しきはなし、造次にも顚沛にも、心を養ふをつとめざる可からず、之れ眞に孝なりと、感得殊に切なり。これより彼れ天恩の慈惠を思惟ひ、專ら心を以て心を養ふに努む。既にして病日々に輕く、所謂日々に薄紙をへぐが如くに快方に赴く。一日病褥より匍匐し出で、强ひて浴を取り、太陽を拜せしに、積年の病、頓に快きを感じ、殆んど全快せるが如き感ありしといふ。同年十一月冬至の旦、太陽を拜せしに、陽氣胸間に徹し、歡喜に堪えず、思はず陽光を嚥下せしに、心氣遽に快活、天地生々の靈機を感得す。時に彼三十五歳なり。而し

て、此時、病全く癒へたりといふ。

彼れ、既に父母の死を悲しみて病にかゝり、病中養心の法を自得し、一日病漸く怠る時、太陽を拜せしに、心氣遽に快活を感じ、後又之を拜して嚥下し、天地生々の靈機を感得せり。彼れが宗教思想の發起は、此にあり、實に本來、敬神の念に富み、更に今此天地の大靈機を得たりと感ぜし彼は、回復の望なかりし病氣の全快につれて一層神恩の深甚微妙を感じて、之を他に傳へんとの念動きたり。彼が宗教家たるの出發點はこゝにあり。或日下婢某腹を痛み大に悶亂せし時、彼一心に其腹を按へて神を念じて「陽氣を吹きかけ」しに、腹痛忽ちに癒へたり、これより彼が名郷に高し。而して之を傳へ聞きて來り禁厭を請ふ者あれば陽氣を吹きかけ、養心の法を傳ふるに、沉痾痼疾も忽ちに癒へしかば、疾の治まるを初歩として大道に導きしといふ。

吾人は茲に下女某に關する奇蹟的事業を擧げたり、そは此の如き事ありしは疑ふ可からざる事實なればなり。而して所謂禁厭によりて下女の腹痛が治せしは、彼れが吹き掛けし陽氣によりしか、又下女が彼れを信ずる信仰に由りしか、或は彼が斯くの如き事を爲さずとも、生理的事情より、當然腹痛の治まりしか、或は手を觸れ氣を吹きかけしが、時に取つての効能ありしか、如何樣にも解し得らるべし。只吾人は多くの宗教々祖には常に斯くの如き奇跡的行爲伴ひ之に由つて、教理の擴布を助くること大なるを思ふもの、而して彼にして最初にかゝる奇跡的行爲あり、之に由つて彼れが大に尊信せらるゝに至りしを認むるが故に、茲に之を擧げ來りしなり、

彼れ、元と一郷の孝子として人の尊敬する所たり、而して殆んど治するに望なき勞癆に苦しむこと二年、家人近親郷黨皆彼れが死を期

し、彼亦死を覺悟せし程なるに、日々に快方に赴き、終に全く舊體に復りしかば、左らでも厚かりし郷黨の尊敬は、舊に倍し、これ凡人にあらず、或は至孝天に通じてこゝに至りしなりとの感をして轉た切ならしめたり。而して偶下婢の腹痛を、陽氣にて治せしの奇蹟あり、彼亦所謂天命直授(天地生々の靈機を感得すといふをさす)の感をなし、人の問ふあらば、即ち天地生々の道を說きしかば、教を乞ふもの漸く多く、名聲次第に高く、遂には、職を今村宮に執る傍、此時、彼れ、父の業をつぎて神官となり居れり日を定めて講を開きしに、遠近來り聞くもの益多く、彼れが邸の大廣間は常に聽者を以て滿つるに至りしといふ。(其かくの如くに日を定めて講を開くに至りしは、果して何年に初まりしか、今記錄の徵すべきものなし。恐らくは、彼天命直授の後、數年に始まりしならんか。初めに當りては、少數有志の士來り問ひしのみなるが、後聽集多きに至りて、遂

に定日講を開きし如し）尚此外に、來つて遊說を乞ふものあらば、喜んで之に應じ、遠近を厭はざりき。實に定席を設け、講會を開きたる重なるもの、時の備前藩有志者池田中務少輔、池田伊賀、土肥右近、土倉正彥、天城屋敬其外十數家あり。圖體にて定席を設けたるもの米搗會あり。或は和氣、赤磐、邑久、上道、兒島等の備前南部地方、及備中吉備津、作州津山の如きも彼れが、時々巡回して、說教し感化著しきものありし所なり。

彼れ、病全快するの後、健康大に舉り、豐頰肥滿、躰容嚴健たるに至りしかど、又病に犯さることなしとせず。即ち文政七年、彼れ四十五才の時、熱をやみ斷食數十日に渉り、天保三年にも大患、七月七日より八月三日まで斷食せしといふ。これを除きその彼の生涯は、前陳の如くに、一方神官の職に從ふの外、一念布敎にあり、三

十餘年、孜々として彼が大道を說きて倦むを知らざりしといふを以て一貫せり。

嘉永元年申十月八日、彼れが妻、森治氏、イク子逝く、彼女歿せし刹那、彼れ涙潸然たり。既にして家人近親相列するの前で獨語して「どうも相濟みません」と、言つて頭を垂れて拜す。蓋し彼れ平生の信ずる所によれば、天恩は感謝に堪へたるのみ、人本然の心を明にする時は、神と同德なり、人間には生なく、死なく、只無窮永遠に涉るの生命あるのみとなすなり。然れども、今眼前に偕老の契長く、翠黛相唱和せし者、忽然として逝く、彼れ如何んぞ悲哀の思に堪へざらん、即ち彼は泣けり。然れどもこれ、彼れ平生の信仰と反し、所謂「感を取外せるもの」即ち彼れ天地神明に對して其過を謝するなり。彼れいと子の永別を詠みていふ

昨日の花今日の夢とはきゝつれど

今の嵐はうらめしきかな
また直ぐ思ひ直して一首
世の花は散らばやちれは天地に
つきせぬ道の花を咲かせん

と。

夫人森治イク子、溫良にして淑德高く、家政治まり、内助の効少なからず。また宗忠の道を信じて頗る篤敬なりしといふ。宗忠此の時、年既に六十九歳、身體大に衰へしも、尚壇に上りて道を説くを廢せず。後には殆んど口語るをえず、只座に上りて端座して神明を拜するに過ぎざることもありしが、時人尚以て感興を得、其嚴乎たる溫容を拜して、道に入るもの多かりしといふ。嘉永三年二月三十日逝く、享年七十一歳。（西紀一千八百五十年御津郡今村大字上中野に葬る。安政三年三月八日宗忠大明神の號を賜ひ、文久二年二月二十五

日洛東神樂岡に鎮座し、慶應元年十二月三日勅願所と稱せられ、明年二月七日從四位下の神階宣下あり。其後明治十二年四月十四日、岡山縣御津郡上中野村に社殿を建て、宗忠神社と號し輪奐壯嚴境地清洒たり。

二、學殖

學殖に就ては、今精細を知るに由なし。然れど如上彼れの略傳性行等より推し考ふるに、別に學問として、諸學を研究せしことなきが如し。幼時書道を一森某に學びたるの外、別に師と稱すべきものなく、又家世を神官たり、而して彼亦幼時より、父に從ひて神官の職を助けしといひ、又彼れの遺文とも見るべき書簡歌詠等によつて察するに、しかく研究的に學問を修めしことなきが如し、勿論十分の斷定を下し難きも彼の學殖は、一般の風習に從ひ、四書五經等の講

究をなせし外は、當時の一般神官が有する程の知識に止まりしが如し。彼れ日遙の名を云へど、敢て日遙の説を述ぶるとか、批評するとかにあらずして、只日遙の歌に和すといふのみ。兎に角彼れが遺物中、しかく多くの書籍なく、又彼れが生涯は東奔西走道を説くに忙しかりし等に由つて察すれば、彼れは決して學者的人物にあらざりしを推し得ずとせず。勿論彼れが折に觸れ、手當り次第に、漫然消閑の具として書を讀みしは想像し難きにあらされど、殊に研究的に讀書せしとは思はれず。（尚之に就ては第三章第二、「宗忠思想の由來に就ての條參照すべし）

三、人物感化

彼れ、幼は勿論孝、父母に仕へて奉養至らざるなく、小壯既に孝子の名近郷に高く、人の敬服する所なりしは前陳の如し。彼れが、三

十三歳にして肺をやむもの、素より其原因の幾部は他にありしならんも、僅に旬日にして父母遽に逝きしを悲痛せしもの、其大なる原因たらずんばあらず。而して病中の彼れの唯一の煩悶は、「孝とは何ぞや」にありしなり。これによつて見る、彼は天性の孝子なりしなり」

彼れ嘗て御津郡加茂村片山某の宅に至る、時に氏の宅に、武者修行者の來れるあり、片山某之と剣を爭ひ、旬日未だ一度も勝つ能はず。座談偶某、彼れに語りて言ふ、余撃剣を學び、士幾年なり。然るに今彼の武者修行者と爭ふも未だ一度も敵に勝つ能はずと。宗忠靜かに笑つて云はく、「ハヽア、アナタは勝たうと思ひますなと。談他に轉ず。翌日某、再び剣を爭ふ。さきの武者大に驚き、且つ怒つて言はく、君何ぞ禮を失するの甚しきや、足下此技あり、而して未だ一度も余を打たず、今余の去らんと欲するに際して、斯くの如きは何故ぞ、乞ふ死を以て決せんと。某、敢て他意なきを告げ、且つ

語るに前日宗忠と語りし所を以てす。是に於て武者亦大に悟り、嘆じて言はく、これある哉と。「ハヽア汝は勝たうと思ひますな」との一語、彼れの爲人を躍如たらしむるものなきか。

彼れ、天照大神を信ずること篤く、伊勢大廟は殊に尊信する所、自からも屢々之に參詣す。而して彼れ、御神樂を献ずるの語は「天照大神の御開運を祈り奉る」としてまた他語あることなし。當時參詣するもの、皆祈りて言ふ、「一家繁盛五穀成就を祈り奉る」「一家繁榮を祈り奉る」或は、「無病息災を祈り奉り合せて天照大神の御開運を祈り奉る」と。然るに、彼は唯天照大神の御開運を祈り奉ると稱して、又他事を願ふなし。凡流と見を異にするものあるを認むべきあらずや。

彼れ、訓誡を掲げて家内の心得となす。今の黒住教徒は、大抵之を家内にかゝぐ。誡にいふ、

○日々家内心得の事

一、神國の人に生まれ常に信心なき事

一、腹を立て物を苦にする事

一、己が慢心にて人を見下す事

一、人の惡を見て己に惡心をます事

一、無病の時家業怠りの事

一、誠の道に入ながら心に誠なき事

一、日々難有事を取り外す事

右の條々常に忘る可からず恐るべし恐るべし

立ち向ふ人の心は鏡なり

己が姿をうつしてや見ん

彼れが宗教家として、如何に說きしか、其性格は如何、に對しては彼れが說を述べたる後に紹介すべきなり。吾人又別に章を設けて、

宗教家としての宗忠を論ず。今次には、只二三の事實を述べて、彼れが感化の一端を髣髴せしむるに止めん。

菱川銀次兵衛なるものは、備前上道郡圓山宗源院の托鉢僧たり。一日、岡山にて、彼れが講釋を聞き、大に感じ、直ちに彼れの座に至り、彼れが臣たらんと乞ふ。彼れ言はく、余はこれ一個の神官のみ、何ぞ臣といふが如き者を要せんや、幸に他に行きたまふべしと。銀次兵衛默して退く、既にして彼れ家に歸れば、庭に水汲む男あり、視れば先に乞ふて臣たらんと欲せしものなりき。彼れ敢て故を問ふなく、銀次兵衛また其此處に來る所以を語るなく、其儘下男となり、終身彼れが家に留まり、娶るを勸むれど肯かず、宗忠の道に歸し、神を語るや、言々肺腑より出で、直に堂をつくものありしといふ。」

森金某、備前和氣郡の人、村人某と爭ふ事あり、之を決せんと欲して岡山に來り、偶中島町に彼れが講を聞きて、大に感じ、勝訴たる

べきを捨てゝ、彼れに歸依せしといふ。

彼れ、一日上道郡金岡村を過ぐ、里人彼れを招じて講を聞く、聽衆多きまゝに天神坊の大廣間に招く、時に偶寺僧あらず、世話方某、寺僧平生敎を說くの際、座する所の金襴の打敷の最と綺羅美やかなるを以て彼れにすゝむ。彼れ即ち之に座して諄々として說き去り說き來りつゝありし時、寺僧歸り來り、之を見て大に怒り、彼れが打敷を奪はんとす。彼れ靜かに之を去り、溫乎として講說を續け、且つ僧が其信ずる所に熱心なるを賞し、春風の渡る心地以て講を終へしに、寺僧大に悔ひ陳謝至らざる無かりしといふ。蓋し彼れが溫容と所說とは、終に之に至らしめしものか。

中野村某なるものあり、嘗て孔子釋迦と彼れとの優劣を占はしむ。卦に出づる所によれば彼れ第一位、釋迦第二位、孔子に至つては第六と、卜者驚きて言ふ、これ何人ぞやと。蓋し某が其初め宗忠の名

を語らずして之を占せしむるものなり。某言はくこれ中野の人黒住宗忠なりと。斯くの如きは寧ろ滑稽の觀なきに非らざるも、人をして敢て孔子釋迦との優劣を判ぜしめんとするは、如何に彼れが尊崇せられしかを知るべきなり。時人いふ、彼れは人にあらず神なりと。後世黒住教徒亦皆尊崇して彼れを以て神となし、現時斯教を奉ずるもの四十萬と稱す。果して眞に然りや否や、充分精確なる能はざるも、兎に角堂々一宗派として存在するを見れば彼れが感化の大を思ふべきなり。

四、重なる教弟子

吾人は、終に彼れが教弟子中、重なる者數人に就て知り得たる所を略記せん。勿論敢て彼等自身に就て語らんとするにあらず、此に據つて宗忠の人物感化を解する一層の便あるを信ずる者なり。

赤木忠春

通稱宗一郎、廿二歳にして兩眼を失ふ。叔父某、夙に黒住宗忠の道を信じ、尊崇頗る甚だし。忠春に勸めて宗忠の禁厭を受けしめんとせしが、彼れ素と漢學の素養深く、禁厭の如きは無理の事とて之を肯んぜざりしが、某が切に勸めしより、遂に宗忠に面會せしに、彼れの說大に聽くべきものあり、痛く之に服し、且つ眼疾も大に快癒せしより、終に宗忠に歸依し、教徒の一人として傳道に從事することゝなれり。宗忠歿後に至りては其信仰は全く狂熱的となり京都に出でゝ教を布く。嘉永四年六月、宗忠明神の神號を許され、安政三年三月宗忠大明神の神號を許可せられ、更に文久二年、洛東神樂岡に宗忠神社を建營せらるゝに至りしは、彼れが京都にありて諸公卿の間に出入し、大に宗忠の靈德を顯揚せしに由らずんば非

ず。彼れ慶應元年四月病歿す、明治二年神祇官吉田家より、赤木靈社の號を許され、仝五年八月、忠春神社と改め、更に其德を慕ふ者は、彼れの鄕里美作國久米南條郡中籾村に一社を建てたり。

時尾克太郎

備前邑久郡の人、農家の生れなりしが、和漢學を修め、私塾をも開きたりし村夫子なり。一旦宗忠の敎を聽きてより、大に之に傾倒し、後には宗忠の巡講にも隨行し、道體を了認せる言々、肺腑より出て大に感化を與ふ。宗忠歿後に至り、傳道の熱心一層旺盛にして、彼れが播州姫路を中心とせる布敎は効能顯著なり。

石尾天了

喜六郎と稱し、岡山藩士にして祿百五十石を食む。學德聲望兩なが

ら、當時藩中の儀表たりし人、此人一度、宗忠の敎に服せしより、事實上、彼れ自身は何等の傳道を試みざりしも、彼れ尙宗忠の敎に歸依すとの一事、却つて無言の傳道を爲せしこと甚だしといふ。

川上忠晶

陽明の學を奉じ、門下よりは、牧野權六、伊東有涯の如き士を出だし、識見大に觀るべきの士たりき。天性頗る孝、其母嘗て眼を疾み一目を眇せり。時に、黒住宗忠が、神力以て禁厭を行へば眼疾の如きは直ちに之を治すと傳へ聞き、人も之を受けよと勸むるも之に赴かざりしが、遂に宗忠を說破し、此怪物の本躰を暴露せんとして、赴き耳を傾くる數次にして遂に、親から宗忠門下たるに至れり。これが爲め、彼れは怪しかる神官の眞似すとて、卑職に貶せられしが、彼は悶ゆる所なく、慍る事なく、悠々陋巷の中、茅舍の下に

甘んじて、著述に從事し、專ら黒住宗忠の旨を發揮するに努む。「傳道新編」の如き、漢文以て黒住教旨を細述せるもの、蓋故らに、漢文を以て認めたるは、之を以て清韓國にも傳道せんとせし素志なりしといふ。兎に角、一藩の碩學にして、陽明學の造詣淺からず、佐藤一齋に學び、大鹽中齋とも親交ありし彼れが、斯る歸依に出でし如き注目すべき事象なり。吾人彼れの著を覽る時は、確に一異彩ある學者たりしを認むるに足るものあり。

森下景瑞

備前藩主池田侯の世臣、幼より只物ならず、維新の際は、藩主の命を奉じて、各地を遊歷し、諸藩の情勢を探り、大に濟世救時の策を講じ、伏見の變の時、遊奇隊總督參謀を以て總督府に隷して、功あり。奥州出征の時は各地に轉戰し、一戰功を賞譽せられしが如き顯

著の事實にして、藩の兵制改革と軍備擴張を其偉功となす。

武に於て、斯くの如かりし彼れは、明治二年十月以後、岡山縣權大參事、大分縣參事より終には、大分縣令に昇り、大に治績を擧げて良二千石たりき。

此人三縣令を辭するの後大に黒住教規を編成し、或は各地に巡教して同教の傳道に勉め、或は職制を定めて功勞かもず、自から常に語りて言ふ。「予の世に處するや、萬事黒住教に遵據して、以て誤り無きを得たりと。餘財あれば書生を養ふも黒住教の傳道とに費せ。宗忠の感化がかゝる人物にも及べるは決して看過す可からず。

星島良平

備前兒島の人、母某深く宗忠を尊信す、良平幼にして痴鈍、母幾度

書を講じ、鞭撻之を勉むと雖、何等の功あるなし。母嘗て泣いて之を宗忠に告ぐ、彼言はく「學問を好きにしてお上げなさい」と。之れより其母又徒に兒を叱するなく、唯愛して至らざるを憂ひ、諄々として教へて倦まず。良平漸くにして、記性堅に、遂に學を好むに至り後藩中の巨儒となり、遠近來り學ばんとする者多し。然れども彼れは、我畢生の業は黒住教經典の編纂にありとして門を狹くして弟子の多きを欲せず。來り學ばんとする次第に多からんとするや、頻に堪へずとなし、居を轉ず。其爲めに、彼れは四度居處を變へしといふ。「三十言」「百二十言」「誠の心傳」及「御小傳」を編す。今公刊され居るものにして、宗忠の思想を解せんとには、何れも、最も之に據らざる可からざる者なり。

略年譜

安永九年　一才　十一月六日誕生　父宗繁(年四十)母つた子(廿七歳)三男

元明元年　二才　[illegible]

仝　八年　九才　[illegible]

寛政元年　十才　[illegible]

仝十二年　廿一才　[illegible]

享和元年　廿二才　[illegible]

仝　三年　廿四才　三月十一日出立伊勢參宮、四月六日歸宅す

文化元年子　廿五才　[illegible]

仝　七年　卅一才　二月父宗繁隱居、宗忠跡目相續す

仝　九年巾　卅三才　八月廿八日母つた子死去(六十九歳)　九月五日父宗繁死去(七十二歳)

仝　十年　卅四才　十月十九日病床に就く

仝十一年　卅五才　正月十九日大病、三月十九日に治る、十一月十一日冬至に天命を直授す

仝十二年　卅六才　正月小野榮三郎神文を捧呈して門人となる

文政四年　四十二才　二月石尾乾介、七月菱川銀三郎入門す

全五年　四十三才　六月長男佐之吉生る后宗信といふ
全十七年　四十五才　三月十二日出立上京(京都廿日吉田へ伺候、神官許し、吠を得て左京と改名伊勢に参宮し四月九日歸宅す
天保元年(酉)　五十一才
全二年　五十二才　四月三日出立伊勢へ参宮す
全三年　五十三才
全九年　五十九才　七月七日より八月三日まで大病
全十二年　六十才　執行口の心をよみける
全十三年　六十一才　向よ事皆御蔭かと思ひなばれてもきめても離有かな
天保十四年　六十四才　出づる日を己が姿と思ひなば置れし年もくろしから
弘化元年(辰)　六十五才　まじ
全四年　六十六才　孔子、宗忠、釋迦に於て占ひし卦あり
　今年より三ツ子となりて天地の恵に育つ神の國
　時尾克太郎森下景鄰神文捧呈、
　三月八日
　涙風をいかで静めん海津神天つ日を知る人ののりしに

全十四年　六十九才　六月十四日(陽暦七月廿五日)死去
嘉永元年(申)　七十才　十月朔日(陽暦十一月十日)葬送
全六年　七十五才　二月廿五日死去(陽暦四月十日)葬送
安政元年(寅)　七十六才　三月八日宗忠大明神の號を賜はる
文久二年　七十八才　七月廿五日京都神樂岡に鎮座
慶應元年(乙丑)　八十才　二月勅願所御出張
全三年(卯)　八十二才　二月七日(陽暦三月廿四日)従四位下神階宣下
明治五年　八十四才　大教院開設の時黒住教は之に附屬す。八月廿二日黒住謙義隊目因つて黒住教社と號す
全六年　八十五才　二月神宮教會附屬となる(後解れて大教院に復歸す)
全九年　八十八才　十月廿三日黒住派別派を許さる
全十二年　九十一才　四月十四日(陽暦)に社殿建築官許
全十五年　九十四才　黒住派と改派す
全十六年　九十五才　四月十八日より五日間遠忌式

第貳章　研究の資料

黒住教なるものが、現時何を爲しつゝあるかは、余の關知せざる所なり。又現時の信徒なる者が、如何に黒住教を解するかも、余の知る所にあらず。世間黒住教に就て記する者最近出版せられし牧氏の著及桑田無堂氏の黒住教祖の宗教の外は、淫祠十一教會日本哲學要論宗教風俗志、六合雜誌の數種に過ぎず。然かも、其記する所、多く宗教制度的方面、又は俗間信仰方面の要領のみにて、中には其據る所、果して何なりや解し難きものも少なしとせず。佛教制度、儀式さては現時の佛教徒が爲す所を見て、直ちに佛教其者なりとなせば大に誤るは敢て呶々を要せず、吾人若し佛教其者を知らんと欲せば、先づ直に釋迦其人の遺說を見るべきなり。基督教を解せんと欲せば、先づ聖書を讀むべきなり。吾人現下の目的敢て現時の黒住教

を論ぜんとするに非らず、只教祖宗忠の宗教思想を見んとするなり。故に可成信徒等が說述するものを避け、直ちに彼れの思想の本色を見んとしぬ。此意志を以て研究の材料に供せしもの左の如し、

一、誠の心傳

黒住宗忠が、人に與へて道を述べたる書簡中、よく簡明に其彼が旨を說けるもの三十五種と。彼れが彼の道に就て咏ぜし歌十五首を集めたるものなり。高弟星島良平の編せしもの、宗忠の思想の一般を知るに足る。明治十一年刊行さる。

二、三十言、百二十言、

共に星島良平が、或は書簡により、或は親しく聞きし宗忠の口語により、教說の旨のある所を示し得る言句を摘集せしもの、恰も宗忠が講釋をなす時の演題とも見らるべき性質のものなり。これ既に出版され居るなり。

三、道の栗俚諺解

星島良平撰する所の三十言を、更に三宅重造なる人が、黒住教教旨に從ひて註釋せしといふものなり。參考の價値なしとに非らざるも、十分なる價値ありとなす可からず、之れ亦出版されあり。

以上は、既に出版され、公行され居るも、如上のみにては材料餘りに少なく、又十分思想を解する能はず。研究上價値あり又十分論證の資格あるものは、寧ろ左の如きものにあらずんば非ず。

四、歌二百餘首

宗忠が折に觸れ時に感じて咏せしものを彼れの沒後門弟家人苦心して集めしものなり。此中十數首は載せて「誠の心傳」にあり三十首は最近印刷されし神咏抄錄にあり。

五、書簡百餘通

これ宗忠が、友人知己に與へて、道を說き教をすゝめしものにし

て、彼れの思想を解せんとには、最も必要なるものなり。他の一切の材料は無きも、尙彼れを解し得ずとせず。然れどもこれなくしては終に彼れを解し得ず。此中二十五種は「誠の心傳」に載せられ、十通は書翰抄錄として近時印刷せられたり。友人黒住宗武君が余に此書簡の大部分を示されしが故に、本書は成立し且つ多少の價値を有す。

六、至誠講義

岡山大供の染工某、常に宗忠の講に侍じ、歸り來りては、覺え書をなせしものなり。宗忠の高弟川上一之丞なる者、文法假名遣などの誤れるを訂正せしも、其要旨に至つては殊更に改竄を加へざりしと稱せらる。宗忠が、如何に講釋せしか、或は宗忠の講義が、如何に斯くの如き人に映ぜしかの一端を知り難しとせず。頗る參考の價値あり。本書に紹介せられし趣旨が宗忠の書簡に由つて見る所と異ならずして、時にはこれによる方が書簡によるより便なる時は、余は

屢々此書より引證せり。而して其都度、余は至誠講義より引き來りしを表はさん爲め、引證文の前に、或は後に、「至誠講義」の四字を加へり。

此外神道黒住教概論とか、大道論など稱し、信徒の眼中に映ぜし所を述ぶるものあるも、研究上十分の價値あるなしと認めて、之に據らざりき。

（注意）以上の如きを以て、本研究に於て吾人が引證する文句には、余は一々其何によるかを述べず。何となれば至誠講義の外は、皆盡く彼れの歌及書簡また口語のみなれば、一々之を記すの要なしと認めたればなり。

彼れの事蹟人物を知るには、御小傳、尾崎とら子御話、

の二書を主とし、古老、門人、信徒、里人等が語る所を聞き、其出所を調べ、信ずべきを採り、尊崇の極、奇怪の說を爲すが如きものは、一切用ゐざるにつとめたり。尙例言中にも述べし如く、牧放浪氏の黒住宗忠傳が、舊稿訂正增加に多大の援助を與へられしことは、更めて述ぶるの要ながらん乎。

第三章　思想

第三章　思想

一、記述の方法に就て

凡そ他人の說を紹介するには、最も正直に之を解し、之と同化すべきこと勿論の事なり。殊に其思想を窺ふべきもの、未だ世に公にされず、又多くの人に由つて記述され居らざるものを紹介するには、特に私意を挾むを避けざる可からず。故に余は本書に於て充分余の宗敎に對する私見を去り一意彼れの思想を汲むに勉めたる積なり。扨斯くして彼の說を記述するに、二種の方法あり。即ち吾人に見えたる彼れの思想を、吾人の勝手なる言語に由つて紹介すること、他は勉めて本人の語により、詞によりて記述することなり。而して兩者は實際に、果して如何程の軒輊を生ずべきか、時には殆んど何等の差異を認むべきもの無らんかなれど、意を用ふるに於ては決し

て同一なるべきものにあらず。而して多くの場合、其何れを取るも、敢て關する所に非らざるか如きも、此に黒住宗忠の思想を紹介するに當りては、特別の注意を拂はざる可からざるものあり。即ち

一、上に研究の資料の條に述べし如く、研究上最も價値ある道歌と書簡の大部分は、未だ公にせられ居らざるものなり。

二、彼れの思想は、學理的研究の結果に出でしに非らずして、天啓的頓悟に出づ（第一章事蹟學殖の條及第三章第二學殖に就ての條參照）隨つて其思想を述ぶるや、系統的ならず、

して彼れが書簡の大部分と、道歌の殆んど全部が未だ公にされ居らざるに對しては、余は紹介者として、大に文致を害し、時に多少は煩雜の厭あるも、重復の餘りに甚しからざる限り、勉めて彼れ自身が用ゐし語辭を、引證し、之に由つて彼れの思想を述ぶるの義務あるを信ず。其天啓的頓悟に出で、學理的系統的記述ならざるに對し

では、吾人は彼の思想を正しく了解するに勉めざる可からず。而して之を紹介するに當りては、系統として或は不完全ならんも、勉めて自然的にして、餘りに彼れの自然の思想と分離を來たさゞるを努めざる可からず。彼れの思想紹介の方法に於て、余が本書に於て採用せし分類法は、學理的分類法より見は頗る不充分なるが如きも、此れ以上の分類法を用ゐなば頗る不自然に陷るの厭なしとせず。即ち、余は彼れの思想紹介上、分類すべき所以のものに就て、多少の注意を拂ひたる積なり。

二、彼れの思想の由來に就て

一、彼れと境遇

凡そ一個の思想家を解せんとするに當りては、其思想の由て來る所の歴史的關係を考察すべきは勿論なり。今宗忠の思想の由つて來る

所以如何、時勢境遇の彼れに及ぼす者如何、彼の學殖如何、性格如何等は確に一瞥するの要あり。而して斯くの如きは、彼れが語る所と、既に述ぶる彼の事蹟に由つて髣髴し得と雖も、茲に多少の推斷を試むも蓋し必ずしも無益の業にあらざらん。其論評に至つては、說を述べ了りし後に於てなすべきか。今は只事實に由つて推定し得る所を述べん。

彼れの思想は、時勢に對する感激に出でたる者には非らざる如し。當時の天下は、紛糾錯亂、麻の如くに亂れにし世なる乎。言はく否、德川の治世、尙續きて、海內平安の時代なり。所謂三百年太平の迷夢を破りし浦賀の號笛は、嘉永六年の事なれば、即ち彼れが死去の後の事に屬す。而して當時新聞紙のあるなし、彼亦必ずしも時勢を解せんと努めし跡なし、彼れが何等天下の大勢に由つて、直接的意識的に動かされしこと無しと斷ずるは蓋し不可なき所彼れの書簡中

亦這般の消息をもらすものあることなし。翻つて、當時の岡山藩の有様を見るに又敢て特に耳を欹てしむる底の異變あるなし。蕃山の遺業未だ地に落ちず、文化或は他に比して進みたるものあらんも、未だ天下を動かすものあることなし。殊に思想上の產物に於て、然りき。彼れ、或は光政蕃山等の爲人を慕ひし事あらん、然れど、之に就て記するものあるなし。姑らく光政蕃山を慕せしとするも、果して如何程、彼れに宗教的思想を與へたるかは、之を推するに難しとせず。更に其他の者に至りては、當時殊に彼れの思想上に大なる奮激を與ふるものあるを認め得ざるなり。所詮彼れの思想は彼れ自身の獨創に繫る者なり。

二、學殖よりの考察

彼れの思想は、如何に他の思想家に負ふ所、大なる乎。彼れは佛教を研究せしか。研究したりとせば、如何程までに爲せし乎。此の間

に向つては、吾人が曩きに、彼れの學殖に就て數言を費やせし所より、多少の推定を爲し得ん。若し彼が大に佛教を研究したりとせば、記錄に特別に記され居るならん。或は何かの話につけ、時に門徒に語りしこともあらん。或は時に佛教的法語を用ふることありしならん。或は佛教に對して、何等かの感情をもらすことありしならん。或は遺物中佛教に關する書籍あらん。然れども、彼が記錄にも、又門人の話にも、何等這般の消息を傳ふるなと、彼れが書簡、道歌中又特に佛教研究に就て述ぶるなく、尙家人の語る所によれば、彼が遺品中又佛籍殆んどなし。而して、彼れが、身神官の家に生れ、幼より神官の職に從事し、且つ本來の性質、學者的ならず、寧ろ平凡にして只誠を專らとする溫厚の村夫子たりしを思はゞ、彼が時に觸れ、消閑の具として、多少は佛籍を讀みしことあらんも、特別に佛教を研究し、大に之れが感化を受けしことなきが如し。彼れが咏歌

中、二度白蓮に就て述ぶるあるも、果して如何程に、如何なる意義に於て白蓮を見しかは推し難しとせず。單に之よりのみ推せば只白蓮花以人物あるを知るも、其が如きのみ。今一つ彼れが佛教者の手になる書を讀みし證存すれ即ち一休が法語なるも、然れども之とて、彼れはむしろ感化を受けしことなきを證す。少くも彼れが宗教思想の由來正に影響を及ぼしたりとなす可からざるものあり。要するに吾人は、彼れの思想が全然佛教に負ふ所なしと斷言する能はざるも、直接に意識的に負ふ所大なりとは信ずる能はず。又次に、舊來の神道に對して、彼は如何程負ふ所あるか。之に對して、吾人は彼が神道に對する學歴如何を考察するを要す。而して彼れは特に神道學者を深く研究せしかといふに、彼の事歴は、其然るを語らざるなり。彼の事蹟は、一般神官以上に、特別なる修養に出でたりしを語らざるなり。彼れはまた當時大なる勢力ある山崎闇齋平田

篤胤等の思想に觸れしことあるかといふに、之も十分其如何を決すべきの事實を有することなきが、強ひて推定を試みんには、此等の思想にも觸れしことなしと言ふの當れるを見る。實に彼れは、又思想を比較し殊に其用語等を驗するも、殆んど何等の類似或は反對に出づるが如き口氣を見る能はず。然れど、吾人は今玆に、此問題に就ては何等の斷案を試みずして、只思想上の關係に就ては、十分なる事實を發見し得ざりしを述べ置くに止めん。尚當時神官一般の知識は、古事記、正日本紀、無紀の儀式に關する知識及吉川流神道位なりしならんと推せられ、彼れの知識も、一此以上に遡ることと無かりしが如し。其他儒教、陽明學、朱子學等に對しては如何との問題に對しては、吾人は之に對しても十分の推定を下すべき證據なきを如何せん。彼れが經歴と、門人の談其他傳說とにより推さんには、彼れが道般の學問

に從事せしこと無しと斷ずるの、適當なるの感なきにあらず。彼れは生來學者的人物に非らざりき、知識の特別に發達せし人には非らざりき、彼れの遺文等によりて見るも、一度も陽明學、朱子學等に就て述ぶるなし。一二度釋迦孔子の名を語るも、其說を批評せるなく、只明德とか、寂滅とか云ふ、一般人の尙熟知する最も、普通なる觀念を表はす以上の語に就て述ぶるなし。恐らくは彼れは五經、四書、或は最も普通なる佛敎書を讀みしならんも、殊に研究てふ研究は爲さゞりしならん。

三、性格よりの考察

彼れが天性至孝なりしことは、少壯の時既に孝子の譽高かりし一事によつて明なり。彼れが敬神の念に厚かりしことは、彼れが幼より大陽を深く信ぜしといふ事實、又病一日快き時、起つて大陽を拜し三十三歲の年の冬至には、一病をつとめて朝日を拜せしことによつて

明なり。更に世々神官たるの家に生れ、幼時より、父に從ふて神事をつとめしの一事、一層敬神の念を深からしめしもの無くんばあらず。斯くて天性至孝の彼は、僅に旬日に足らざるの間に於て、遽に父母の逝くに會ひ、悲嘆の極終に肺を病みしにあらずや。一旦「壽限」を覺悟し、從容として死を待ちし彼が、翻然として、我が身は父母の躰なり、之を傷くるは、却つて不孝なりと感じ、陽氣にならざる可からざるを悟り、心を養ふの法を發見し、而して一日、强ひて浴をとり、大陽を拜せしに、心氣頓に生々、終に病全く治するに至りしといふもの、其間の經過は、之を今日の所謂科學的眼光より見ば、一笑に附し去るべきかなれど、吾人はかゝる事實の存在を否定する能はず、又常に見聞實驗する所なり。敬神の念に富み、殊に大陽を尊信し、養心の法は、生々の陽氣を以てすべきを感得せる彼れ、如何ぞ此不可思議なる事實に對して、大なる天地神明の德惠を感ぜら

んや。況君人を以て觀るに、彼れの思想の由つて來る所は、彼れが性格中、最も著しき者の觀念と、病中の自得による養生法と、神秘的宗教經驗によるもの最も大ならざるを得ず。否、彼れの思想の發端は全く此にありといふも不可なし。人は誰しも自己の經驗の範圍を出でず、或者は言ふ。彼れの思想や、必ずや之を諸先輩に得、或は儒教佛教更に基督教に得たるならんと。誠吾人は、不幸にして其然る所以の事實を發見し得ざるも、決して分之を說破して餘蘊なきを得せしむる丈の畢竟なきを如何せん。只吾人は知り得たる事實に由つては、彼れが思想の由來に就て大躰如上の見をなす者なり。玆に於て、疑問は起らざるを得ず。佛教儒教其他諸先進の思想家に負ふ所となくして、斯くの如き思想は、出て來り得るかと。吾人、所謂偶ゝ之れ必ずしも不可能の事にあらず。況乞彼れが思想を述べて後に、神道の精神に就て多少の洞見を試みよ。吾人は、彼れの思想が直接的意識

的には此等の教に負ふ所なくして、出て得べき所以を推し得べき乎。而して吾人が、本節に於て此の說を爲す所以は、一方、彼の思想の由來に就て多少究考し置くの要あるを認めしと共に、他方、何等の擧證なくして、或は宗忠は耶蘇教の思想に負ふ所なしと論ずる者もあり。或は陽明日蓮の思想を彼れ的に換骨せしなりと論ずる者もあり。或は佛教より來ると述ぶる者あるやに見受けたればなり。

二、世界觀

彼れの思想は、哲學的ならずして宗教的なり。究理に究理を重ねし思索の結果にあらずして、頓悟的天啓的のものにして、敢て宇宙世界を觀じて後人生の問題に入りしにあらず、直ちに近世的に火生其者の意義を尋ねしにもあらず。之を以て、彼れは、我が世界觀は斯くの如しとは述べず。むしろ人生を感ずるの裡自から、彼れの世界

觀なるものあるなり。而して吾人多少意を用ゐんか、彼れの世界觀を知り難しとせず、而して此の世界觀を述ぶるなからんか、彼れの人生觀は解し得られず。故に吾人は文脈理路に於て、多少の整正を缺ぐあるも、玆に暫らく先づ彼の世界觀を窺はんとす。

彼は、宇宙に大精靈あり、世界は之に由つて支配さるとなしぬ。さて其精靈は如何なるものか、吾人は之を考察せんとす。左に擧ぐる彼れの神靈觀を觀ば彼の世界觀を解し得ん。

凡そ天地の間に萬物生々するは其元皆天照大神なり、これ萬物の親神にて其陽氣天地に遍ち滿り、一切萬物光明溫暖の中に生々養育せられて息む時なし。

凡そ、覆載間の森羅萬象の生々たるは、宇宙に大神靈あり、大精神あるが故なり。一切萬物の根源はこれにあり。此の大精靈を天照大

神といひ、此の天照大神は、有限を超絶せる絶對にして不生不滅、無窮より無窮に永遠より永遠にわたる大精靈なり、一大元氣なり。

吾人は、今此の觀念を彼れの語に由つて述べんとす。即ち彼れ、道(彼れの道は彼れの神より出づ故に道といふは彼れに從へば神といふと同意味なるなり)の一つなるを述べて言はく

幾度申上候ても、其元は只此〇一にて外に道は御座なく候云々

道は兼〳〵申上候通、只一つにきはまり候間、少も少も六ヶ敷事は御座なく候

露ごとに月はやどれど大雲の

誠の月はひとつなるら舞

根本的絶對神は一つなり。而して、此は、如何なるものぞ。有限なるか、否、そは無限絶對なり。生命なき死物なるか、言はく、否。彼は生けるものなり、時間に於て永遠に、空間に於て、無窮に渉り

て生けるものなり

いにしへも今も昔も此頃も

昨日も今日も同じ道なり

（萬古同一の神が此世を支配することを表はす）

有無の中に住むべき無きものを

無しと思ふな無き心にて

（神の有限を超越せることを表はす）

天地と共にめぐりし心こそ

限り知られぬ命なるらん

（神は無限に渉りて生命あり）

道に入りたまふ人は御一生の御事計りにはあらず天地あらん

限りの御事也（仝上）

第一に天道は生々にて天地の道には死と申す事は更に無之者に

御座候（神は不死的なり）誠に道は生通しにて皆心から生きさへ

仕得ば限りは無御座候

限りなき天照神と己が心

へだて無ければ生通なり

（神の無限にわたりて生命あることを表はす）

扨此の如き神の形容は如何。彼れは思へり、神は以て名づくべきなし、強ひて形容せんか圓きものなり、圓滿にして無礙なるものなり。何等人工的虚僞的臭味なく、自然其儘なるものにして赤裸々なりと。

道は○きより外は御座なく候、時に出放だい申上候

まるき中に○き心をもつ人は

かぎり知られぬ丸き中也

是即生通し也。何事も限りを付玉ふ可からず。○き御神に年は寄

不申候

道といふ名に迷ひ、明暮道に迷ふ人其數知れず、誠に大道は其儘なる所が大道也

次に、吾人は斯くの如き神の能力に關する彼の思想を窺はんとす。

神の働きは何ぞといふに、萬物を生々發育せしむることにあり。

天道は生々にて天地の道には死と申す事更に無御座候

夫れ人は、日月天地の氣を受け、人となり、既に人は天下の動物なり、一切萬物天地より產出せざるはなし(至誠講義)

神は永遠無窮に涉りて活ける圓滿無礙の精靈なり。扨此神の本躰其物は何ぞ。彼は之を解していふ。神は誠なり、其德は惠なり、限りなき惠なり、而して此誠の氣は六合に遍滿し、生々光明の靈氣にして一切萬物此靈氣中に存在すとなす、否一切萬物の心髓は直ちに之れ神なりとなす。吾人は茲に於て大塩中齋が大虛の氣の說を思はず

して止む能はず。又彼のジャルダノー、ブルーノーの神の觀念と甚だしき相似を見出さずんばあらざるなり。斯くて彼れの神の觀念は、基督教的一神教に非らずして、萬有神教的なり。乞ふ次に引證する所を見よ

鳥が啼あづまの果も今此も

同じ誠の中と思へば

君が行く遠き吾妻も此里も

同じ誠の心なるらん

天照太神の御神德は言を以て難述御事にて候へば、難有と申候より外御座なく候(神の德)

神佛聖といふも天地の

誠の中にすめる生き物

(神の本躰は誠なり)

天照神の御德は天地に
　滿ちてかげなき惠なりけり
（神の德は無限の惠なり）

吾人は、今敢て批評を加ふるを爲さて、直ちに、斯くの如き世界觀の上に立つ彼れの人世觀を考察せん。

四、人生觀

人は如何にして造られしか。如何なるものなるか。何を爲すべきものなるか。これ彼れが煩悶せし問題にあらず。彼れが人生觀は、彼れが病の治るにつけ、所謂神德の無限深遠の慈惠を感ぜし感謝に出づ。「難有き」と感ずる活ける一心の誠を擴充せしもの彼れの人世觀の基本なり。彼れは斯くの如く感ぜしが故に、何故に人は此世に出で來りしかに就ては明に述べず。只如上彼れの世界觀より見れば、天

照太神の生々の德に由つて、人は此世に出て來りしと感ぜし如し。

我心も、我身も、天地の物なれば、何事も自然のなす所なりと存心を發し居申候。

心も日月より來り玉ふ心なり。

ば、無理にすづるにも及不申候。形も天地の自然とちゞみ給ふ形なれ

即ち彼が、人間は天地生々の氣に出つて生れ出でしものなりとなす

を見る可からずや。而して彼れは人間を心と身との二つに分ち心を

ば天照太神の御分心或は御分靈といひ。身をば形或は我といひぬ心

はこれ天照太神の靈なり、分心なり、直ちに之れ宇宙の精氣なりと

なしぬ（心身相關の項即ち本章第五節參照）

吾人は、此所に彼れの心身相關に於て述べされば、彼れの人生觀を解するに、多少の不便あるを思ふ。然れど今此に之を述べんには、又人生觀を壞め知らざれば不可なる非情あり。所詮何れにするも不便少しとせず、混じて之を述べんか、序述やいもすれば、煩瑣に陷るの憾あり。故に暫らく心身相關の說を問は

ずして、彼れに映ぜし人生觀を述ぶ

彼れは謂ふ。人生苦といひ、鬼と云ひ、蛇といふは、皆我に執着するより出て、肉が心を蓋ひ枯らすが故なり。迷とは、身が心を使ふなり。悟りとは、心が身を使ふことなり。而して心は「從たる」べきものなり。而して心は直ちにこれ神なり。而して神は永遠無窮に宇宙に遍滿せる活ける誠なり。故に心が身を使ふ時は人は神と同じく不生不死なり。形を捨てゝ一切を神に托せん時には、人生は實に安樂至極、些の憂慮すべきものあることなし。吾人は只歡喜に滿つるのみと。吾人は、今彼れが、如何に人生を不生不死と觀ずるか、如何に歡喜に滿てる安樂世界と感ずるかを見んとす。

天地とともにめぐりし心ぞ

限り知られぬ命なるらん

天照す神の宮居に住む人は

限り知られぬ命なるらん

天照大神と一心に相成り、少しも亂れ不申時は、死と申す事、絶えてなし。是れ神明一躰にして、天地の間に明かの大らざる事更になし。

生通と申す事は、心も肉躰も、共に生榮へ參る候事、道の本意に御座候。心が活物に候故、心活きて參り候はゞ、形は心に付隨ふもの故、共に活榮え參るに、限りは御座なきものに御座候。第一、天道は生々にて、天地の道には、死と申事は、更に御座なき者に御座候（中略）我を離れ、誠を勤むるが、即活き物に御座候。此活物を以て、天地の活物を呼出しさへ被成候得ば、自由自在に御德蒙られ候也。我を離れ候誠の本躰が、直ぐ天照大神と御合點可被成候。我を離れ候誠は、天照大神と少しも障なき活物に御座候。

限りなき天照神とわが心
（隔）なければ生通なり

此歌の場を、返す〳〵も御信心被下度御事に御座候。
即ち、不生不死の活ける神の分心たる此心が、身を使はんか、人生は不生不死なるなり、生々たるものなり。實に、誠の神は、此人生宇宙を支配せり、其徳は慈悲なり、彼れは思へり誰れか人生を苦とは云ふぞと。然り、肉を思ひ、我を思ひ、形に執着するの間は、人生は苦ならんも、之を捨てゝ、神の分心なる心を養はんか、心は即ち誠なり、神なり、其徳は限りなき悪なるが故に、人生は苦痛にあらずして歓喜となり、只難有きといふ外亦他事を知らずといふもの上來繰返せるが如く彼の人生觀の骨子たり。

天照す神の御徳を知る時は
ねてもさめても難有か那

道は、誠に難有ものにて、常に○き中に住み、日々を難有嬉敷、何事も面白く思ひ暮らし候得ば、其面白きか、天照る御神の御心也。心一つ開ければ、何が苦しみはなし。何に付ても楽み難有事計也。

何事も難有〳〵にて日を送り被成候へば、不殘難有相成可申也。
少しも御油断被成間敷候時に御一笑

何事も、難有にて、世に住めば
向ふもの事難有きなり

善悪共に難有と思へば、時々事々に難有也。元來此世に生れ來候を、能々考へ候得ば、難有か形の持前也。難を難と思はぬが我執行也さすれば、苦になる事なく苦にならぬ時は、あとは楽み計なり。左様なる心は道より外になし。其故道に心住は大安楽也

既に人生は安楽也。何等の憂慮苦痛のあるなし。人間は、斯くの如

き世に住むなり。日夜歓喜に満つるの外、豈に亦他事ある可けんや。

あら嬉しかゝる楽しき世の中を

誰れか此世を苦の世とは云ふ」

是れ程の有がたき世に生れきて

苦しむ人ぞあはれなりけり」

たもつとも又捨つるとも思ふまじ

只楽みの心計りに」

や天照す神の御腹に住む人は

有無の山生死の海をこへぬれば

雲霧は自然の風のはらふなり

なき身を知れば

夫れ斯くの如しと雖、彼れに人生を苦と観ずるの念全く無しとはいふ可からず。然れど彼れは人生の苦に就て逃べしものなく或は頗る少なし。只吾人、之を彼の語に徴して多少推し得るのみ。所詮、彼れは只人生を安楽とし、歓喜に満つとなす。悪事難事も亦難有しと観ずる彼れの思想は実に著しき楽天観の上に立つものなり。而して之れは彼が神観に基くとせば、吾人は如何に彼れが一切を神に任すの念深厚なるかを見るべきものあり。

五、心身の相關

前節に述ぶるが如く、吾人生は安楽なり、感謝に満てる世界なり。而して斯くの如き彼れの人生観は、何処より来るかと云ふに心は之れ神の分霊なりとの意識より来れり。扨人は心のみなるかといふに、否、肉躰ありとなす。（肉躰を彼れは形或は我或は器とも云へり）其肉

は、人生をして苦と認めしめざるか。隨つて心身の相關や如何。これ既に、彼れの人生觀を述ぶる節に引證する所に由つて、多少髣髴し得られざるに非ざるも、吾人は此に、特に此兩者の關係に關する彼の所觀を述べざる可からず。何となれば、之を明にせずしては、如上の彼れの人生觀の說明は完しと云ふ可からず、又他面に宗教家としての彼れの思想中の最も精華なるべき神人合一幽現一致の意識を解し得ざればなり。これ吾人が、此に一節を設くる所以なり

心も日月より來り玉ふ必なり、形も天地の自然より生み給ふ形なれば、我と無理にすつるに及不申云々

哲學的思索に出でず、たゞ至孝と敬神とより出でし彼れの思想に於ては、身躰の由來に關しても、一斯くの如く自然と天より出でしものと述ぶるのみ。扨兩者の關係は如何

形は心の入れ物、

入れ物計り大切にして肝心の心を養ふ事を知らぬ……

即ち、心は主たるものにて、形は從たるものなり。此形は如何なる作用をなすものなるか、

生れ子の次第次第に知惠つきて

天照す神に遠くなるかな

只々我を離れ彼成候はゞ、自然と天の惠みて何事も榮へ參り候に疑ひなく、兎角我よりなし玉ふ事は、御形の爲、御心の爲にならぬものなり。

といふに由つて觀れば、人生を苦と感ぜしめ、蛇と思はしむる本源は肉にありと見しなり。既に心は主なり、而して心は即ち是れ神なり、而して人生は、不生不滅の歡樂世界なりと觀ず。然り而して人生夫れ斯くの如しといへども、此肉躰は果して如何との疑問なき能はざるべし。彼は言へり。此肉躰も、主たる心に從ひなば、心と共

に活き通しとなり、不生不滅のものとなると
天地の道には、死と申事は更に無之者に御座候間、此所御會得被
成、願くは形諸共に活通しに被成度御事に御座候云々
尙如何に、彼れが心を主となして、人生を苦となし、樂と觀るは皆
この一つの心によるとなすを見ん乎。
人は、萬物の靈長たる者故、心の用ゐ樣にて何になりともなられ
るもの故、心を神にして神の行ひをすれば神なり。心を佛にして
佛の行ひをすれば佛也。鬼の心になり鬼の行ひをすれば鬼なり。
心から活きられもする死ねもする
己が命はおのがまゝになり
生死は心一つにあるものを
知らぬ浮世の人のあはれさ
命こそ心の儘になるものを

誰れかわかれをなげくなるらん

人生を苦となし、悲哀となすは、皆我に執着するが爲なり。今吾人
神の分靈なる心の本然の性を發揮せしめんが、人生は只歡喜のみ。
人生を苦と觀じ、樂と觀ずるは、一にかゝつて心の本性を明にする
と否とにあり。吾人、如何ぞ、容器の爲め、其內實を左右せらるべ
きものならんやといふもの、彼れが心身相關に就ての思想なり。茲
に吾人は、彼れの思想の、甚だしき唯心的傾向を認むべきなり。次
に吾人は進んで、斯くの如き心身相關の見地より來る彼れが神人合
一の意識を述べざる可からず。

六、神人合一の意識

天照す神は、永遠無窮に活き、其精氣は宇宙六合に遍滿し、山川、
動植、庶物、一切皆其氣を含まざる者なきなり。而して人間は身と

心とを有し、身は天地生々の氣に由つて生ぜしものにて、心は直ちにこれ神の分靈なり。既に心と神とは、其本性に於て一つなるが故に、心だに誠となりなば、吾人人間は神となる、即ち神人は不二なり、當然に來るべき歸結なり、

其誠を得て活物を捉へば、即天照太神と御同席御同德となる」

我を離れ。誠を勸むるが、即活物に御座候。此活物を得て、天地の活き物を呼出じさへ敬成候得ば、自由自在に御德蒙られ候也。

我を離れ候誠の本躰が直ぐに天照太神と御合點可被成候。我を離れ候誠は、天照太神と少しも隙なき活物に御座候。

我を去り、肉を離れ、誠の一心になれば、吾人は直ちに神なり。人は、最早一個の有限なる者に非らずして、無限に生ける神なり。我が心は最早これ人心におらずして、神の心なり、天地の心なり。我が身、亦死すべきものに非らずして、永久の活物なり。かくて擬轉

窮まりなき無常などの、何處にあるべきぞや。雨とは何ぞ、嵐とは何ぞ、喜とは何ぞ、悲みとは何ぞ、之れ遂に無意義の者ならずや。這般の大意識を歌へる彼れが高懐、眞に偉大なるものあるを覺ゆ。

無き身を知れば斯くの如きぞ」

天地を我が身の上と思ひなば

雷雨降らば降れ風吹がば吹け」

我といふ其一物を捨ぬれば

廣き世界は我身なるらむ」

姿なき心を生きて遣ひなば

天が下にはみちわたるらん」

我姿尋るに又及ぶまじ天地

只天地に照り渡るもの」

第三章　思想

天照す神の中に入ぬれば
道も己が身も天照す神」

己が姿をはなれて說く時は、口ばかりなり。其時何となく無心の所が口に出づる也。是即ち天のいはしむる也。又聞く人も耳計にて聞為候はゞ、誠に一躰なり。天地一躰なる時は、外に我といふものなし。其時は天心なり。少に而も心あらば、迷出と奉存候

何事も、皆天命を樂び時は、勿躰なくも天照太神様の腹なり。

斯くなれば、今より後は、天地の内は、己が住む家となりなん」

我は神なり、永久なる活物なり、無窮なる天地は我が住家なりとの此意識に一度到達せんには、金錢何者ぞ、所謂浮世の富貴榮譽何者ぞ、吾等、如何んぞ、名譽金錢の奴隷となるが如き淺間敷心の生ずべきや。世上偏ゝの功名利達は、塵穢の如けんのみ。彼は謂へり。

天照神を、親とも御主人とも思ひ候得ば、不束なる心は、出て申

さず候。

天地にゝとらぬ程の活物は

おのが心と思ふれしさ』

浮世の寶と申すは、金銀ほど結構なる寶は無しといへども、今、人に千貫目、或は十萬石の知行を遣はそふと云ふたちば、悦ぶべし。乍併、其千貫目或は十萬石をやる代りに、其方の首を切て渡せと申さば、一切て渡すべきや。世の寶の最上なるは、則命也。其命なくては、千貫目の金、十萬石の知行もいらぬなり。其千貫目の金よりも、貧乏の首にても、其首の方が入用也。其貧窮の體にても、此道に入て參り、自然誠の活物を得て見れば、千貫目や十萬石には目はがらず。三千世界が我が物となるなり。道の本體修行を流さぬ様に致さるべし。兎角形の有る故に體に付て流るゝなり（玉鉾講義）

第三章　思想

嗚呼何たる氣焔ぞや。實に神の愛に醉へる時は、大哲スピノーザは一個の玻璃磨き工として、世上幾多の迫害に對して、悠々自適全く關せざる矣の態度に出て得るなり。神は愛なり、我は神の子なりとの大自覺に達せる時には、桶工の息子は、權威赫々たる羅馬帝國も果た何者ぞと絶叫し得るなり。之を神といふも可なり、佛といふも可なり、大我といふも可なり、絶對といふも可なり、たゞ夫れ這般の一物を把握し來らん時、人間は終に人間にあらざるなり、神人たるなり。吾人常に天下偉人傑士の心胸を窺ふ時は、何人も此の大活物を有せざるなきを認むべし。吾人は更に溫厚篤實の宗忠が、氣を吐き來りて虹の如く、這般の豪語を爲すに至るを見て、彼れの胸中にも一つの大なる者宿りしを追懷せずして止む能はざるなり。

七、彼れの神世の觀念

古も今も昔も此頃も

昨日も今日も同じ道なり」

今時の人、世が末になるといへども、昔も今も世に變りたる事なし（至誠編輯）

此間も、不計一首。餘り高上に御座候得とも、自然と出候まゝ

千早振神世も今も同じ世を

みな末の世と思ふ憐れさ

と讀み、其講釋仕候。昔の心も無形、今の心も無形、我が分別をつけて見れば、古今の隔なし。おほいにすませば、大に通ず。其通ずべき心のみにして、形を忘るゝ時ば、今も神代なるべし。今乃小子講釋致すとも、神世講釋也。聞く人の心も我を離れ玉ふ時は、直に神世也。神世も、次第に神德厚く相成事と存じ、彌難有奉存候、」

堯舜の世としいへば、君は圓滿完全の神、民は善心の權化の如くに思ひ、一切臭汚の存するなき理想的黄金世界の如くに見做すは、人の審美的感情に基く一種の偏見なり。未來や過去に、天國と淨土とを憧憬するは、多くの宗教に通ずる感情なり。而して彼れの神世を解するを見るに人心淳朴にして、已れ一人に止まらず、世上一般の人心、皆殷意になり、淳良の本性を發揮せば、これ神の世にして、之を措きて神世なるものあることとなしとなす。故に神世は過去にあらず、未來にのみあらず、只内に心を觸にする所にのみありとなす。げに彼に從へば、今も昔も、昨日も今日も、同じ道が此世を支配するが故に、神世は現在に於て直ちに求め得べきものなり。吾人は玆に彼れの現世的觀念の如何を認識すべきなり。此現世的觀念につれて、吾人は人間の日常に對する彼れの所說の他の宗教に比して、宗教的ならずして、蓋だしく倫理的なるを見る

道といふ言葉に迷ふ事勿れ、毎日己がなすわざにあり、而して此と同樣の意を表はす語は、彼の書簡口語中に少からず。今一々之を擧げず。實に吾人が爲す日々の事業行爲、盡く直ちに神と相關し、我等が行爲は、未來の爲めにあらず、過去の爲めにあらず現在の爲め、其事自身の爲にして、又神の爲めなりとの觀念は、前節に述べたる彼れの絶對神觀より來る當然の見解なり。斯く一切日常の行動が、直ちに神と相關するに於て、吾人は日常の行爲其れ自身に多大の興趣を感ずるの傾向あり。普通の見解に從ひ、未來にのみ天國淨土を憧憬するを宗教的といはんには、彼れの思想は倫理的と云ふの、寧ろ適切なるを認めずんばある可からず。

八、四海同胞主義

人間は、皆これ天地の大父母なる天照太神より出づ。而して、神は

六合に遍滿せる誠、人心も其本躰は誠にして、既に人と神と不二なりとせば、豈に人と人とも不二ならざるの理あらんや。果然、吾人は彼れの四海兄弟の見解を見るなり。

誠ほど世に難有きものはなし

誠一つで四海兄弟」

皆人の知れる事をしらぬか那

親も我が子も我が身なりとは」

至誠講義に

我も人も、よきこそよけれ。四海の内皆兄弟なり。同じ天より惠みを受て、人となりければ、人の悔みは己が悔みなり。人の善事は己が善事なり

と述べ印度の兩頭の鳥の譬喩を引きて、説明し。「一つの頭は強く、他は弱なり。弱なるもの、食を得て食はんとすれば、強者常に之を

奪ふて嘗て一度も弱者をして食はしめず、此に於て、弱者怒りて、一日毒物を捉へ來り、食はん眞似す。強頭、例の如く、奪ひ之を食ひしに、直ちに死しぬ。而して、弱頭亦之と一躰なれは、つゞきて死しぬ」と、説明して結び言はく

人の惡しきを好み行ふ時は、矢張我惡敷事を好むも同然也。人の躰は、假に顯はれたるものにて、人は則天地神明の御分魂なれど假の神に宿りたまふ（以下不明）

即ち、人の喜びは我が喜なり、我が憂は人の憂なり。何となれば、人と我と、共に神明に由つて造られ、誠の中に住める者なればなりといふ思想を認むべきなり。

九、彼れの神道

附國躰觀、日の神。

彼れの神道は、果して彼れより以前唱へられしものと同一なりや。又差異ありとして、如何なる差異ありや。抑も、神道は如何なる者なりや。此等は多少の說なきにあらざるも今述ぶる限りにあらず。茲には只彼れが神道となす所以のものを述べんとす。

人は、萬物の靈長たる者故、心の用ひ樣に而、何になりともなられるもの故、心を神にして神の行をすれば神なり。心を佛にして、佛の行ひをすれば佛なり。鬼の心に成り、鬼の行をすれば鬼也。畜生の心になれば、畜生なり。今何になるとも、心の內に拵候物出來次第になる也。神道の執行は心に神を拵、神の行をする社神道なれ。望次第に成られる故御油斷被成間敷候」

人は、心の持ち樣により、鬼とも蛇とも、天國の人とも極樂の人ともなり得るなり。人生苦と感ずるも、樂と觀ずるも、皆各自が心の欲するまゝになりとは、彼れの唯心論なり。而して神道とは、心內に、天

照太神を造り神となり、永久不變の活物となり、歡喜の海に漂ひ、威謝の念に溢れ、天地生々の神德を樂むことなりとは、彼れの國躰觀大精靈と一致することなり。否直ちに宇宙の神道といふに附屬して、常に最も多く來る問題は、國躰に對して、如何なる見解を有するかとの問題なり。此の問に答ふるには、余は彼れが書簡と道歌に於て、直ちに彼れが我國躰及皇室に對する見解を、明かに正面より述べ居るものを發見する能はざりしことを述べをかざる可からず。然れど彼れは、我國躰に對して何等特別なる觀念を有せざりしやと云ふに大に然らざるを認む。吾人は、彼れの思想一般を基礎として二三の片言零語(されど有力なる見解となし得る)に由つて、吾人の推定を試みんとす。

彼れいはく

天照太神も八百萬神も本體は一體なり

これ吾人が、前に彼れの神觀の萬有神教的なるを述べし所に由つて明なることなり。即ち彼れは、確かに一神即多神、多神即一神の見解を取れるなり。扨此見解を認めて吾人は彼れが

限りなき神と皇との一系を

わすれ給ふな人のこゝろに

といふ意を解せざる可からず。之に由つて見れば、彼れは明かに天照太神と皇太神(皇室の御先祖)と同一なるを述ぶ。既に、彼は、八百萬神も天照神も、其本は一體なりといひ、更に

信心の本は忠孝、忠孝が立たねば信心にてはなし

といふ意を推す時は、皇太神は一神即多神の一特殊の場合とには非らずして、完全なる意味に於て、皇太神即天照神とも考へたるが如し。然れども、若し人ありて彼に問ふに、然らば天照神即皇太神か

を以てせんには、彼れは直ちに然りと應答せしや如何。理路に於て確に疑あるべし。蓋し彼は八百萬神の内に於て、皇太神を以て最も尊敬すべく高等の位置にをき、天照太神と殆んど同位に座せしむべきものと感ぜしならん。さりとて斯くの如きは、彼れ本來の神觀の性質と、調和せざるものなり。兎に角、吾人は此點に就て十分なる見解を汲む能はざりき。他日明快なる彼の觀念を知り得んには改めて紹介するの機あるべし。

以上は、之れ皇祖に對する彼れの見解なるが、日本國に對して彼れは如何に述べ居るかと云ふに

有り難き己が日の本に生れ來て

其日の本を知ると思へば」

日の本に生れながらに日を知らず

枝葉にともす火をかりて見る」

といへり。之に由つて見れば、彼れは確かに我日本を以て、他に勝りて天照神より神恵を蒙り居る國と思ひしならん。或は斯く解するは彼の本旨にあらずとも覚えらるゝ。

日の神(太陽)

説を爲す者あり、宗忠は毎朝太陽を拝せしと傳へらる、是れ太陽崇拝教ならずやと。而してまたふいに。彼れの日の神太陽は即ち天照太神ならずやと。吾人も初め斯く思ひしが、能く研究して見れば宗忠は庶物的太陽崇拝家にあらず。若し今の黒住教徒が太陽を以て、即ち天照大神とせば、これ形を見て、實を解せざる彼等の過誤とせざる可からず、即ち吾人が此に特に彼れの太陽觀を見ざる可からざる所以なり。彼れ云はく

形があつて生き通しの物は日月星辰なり

一切萬物、皆神たり得とは、彼れの見解なり。而して、彼は謂へり。

形ありて不生不滅なるものは日月星辰の四者なりと。即ち他の有形諸物は、神の氣に浴し、神の作れるものにて、不生不滅のものにはあらざるなり。斯くて、彼れはかゝる意味にて太陽を以て不生不滅の神となせり。然らば、何故に、彼は太陽と共に月星辰を拝せざるやの疑問なき能はず。此に就ては吾人は彼れの宗教思想の發端を考へざる可からず。太陽を拝するは、彼れの幼時よりの習慣。陽氣を萬物に蒙らしめ、生々の德を歪るものは、太陽なりとは、彼の實見する所。彼れ、一日病快きとき、太陽を拝せしに、陽光胸間に徹して、遂に太陽を嚥下せりとは、彼れの宗教的神秘的經驗なり。斯くて、彼れの此經驗と、幼時よりの特別なる信仰とは、合して、太陽を通じて無形幽玄なる天照太神を拝するの標的とならしめしならん。即ち、神の生々陽氣の德の、最も能く顯はれしものとして、太陽を見しならん乎。後の黒住教徒た

るもの、此事實よりして、太陽を尊信するの結果、天照太神即日の神と信ぜんか、これ宗忠の本旨には非らざるが如し。若し誤つて、太陽即天照太神なりとせば、彼等は自から黒住教を以て太陽崇拜教と爲す者たらずんば非ず。然らば、同教は迷信教なりといはれて、何の辭を以て答へんとするや。聞く所によれば、同教信徒中には、庶物太陽崇拜家尠からずと。果たして然らば、宗忠をして遂に一個の迷信教々祖となしたるもの、遂に教徒自からならずんばあらず。同教々徒たるもの志すべき事にこそ。

十、信心の觀念

父母の死に、非常なる悲嘆を感じて、病に犯され、終に立つ能はざらんとし、自からも死を決せしものゝ、隅々心の養法を發見し、天地の一大靈機を感得し、神道の先導者たるの大自覺に達せし彼れが、

信仰に關する思想に於ては、吾人は宗教家的情熱の烈しきものを認めざるを得ず。

祈りなば叫ばぬ事は無きものと
知りつゝ祈る心なきとは」

只今、何程の難病身に逼り、躰を鎗にて刺さるゝ苦しみに逢ふとも我も心も捨て、誠計りに成りて心を痛めざる時は、其心は活物なれば、自然と其病苦は去るなり」

「天照神の御心と一躰になるが信心なり。誠を取外さぬ樣に勉むるが道の修行なり」。一心をすまして、誠を勤め、信心せば、我はこれ直ちに神と同心一躰となるが故に、天下何物の悲憂災苦も、人間の心を痛ましむるものあるなきなり。

世のちりをはらひ捨たる己が心
誠のうちに長く住むらん」

向ふもの皆御陰かと思ひなば
　ねてもさめても難有かな」

己が己れと思ふも天の己れなれば
　何にとかあつて災やある」

只神を信ぜよ。然らば人生は歓喜なり、安楽なり、苦あるなく、憂あるなし。病氣の如きは信仰の力に由つて治せんのみ

むつかしき病も己が心から
　直せば治る道は此の道」

天照す神の御徳に叶ひなば
　萬に成就せざることなし」

信心は、御心に年のよりなされぬ様、萬事日月様に御任せ、いつまでも小供の心を御はなれ不被成。日月様を、乍恐親様と思ひ、形の事を御忘れ被成、心ばかりと思召御暮被成候はゝ、自然と御

陰は顯はれ可申候。

彼は即ち謂へり。信ぜよ、然り只天照神を信心せよ。然らば人間萬事何事か爲らざらん。全能の神我と共にあり、不可能の事あるべきなしと。「至誠講義」に載する所、一言一句、盡く彼れの所說なりや否やは保し難きも、信仰の効力に對する彼れの見解の、如何なる者なるかの一端を知り難しとせず

（前略）我として、世を末にして、行住座臥心を痛め付る故、種々の病を引出し、或は瘡瘍、疳症、癩病、癩病、熱病、溜飲などを初めとして、四百四病に惱まされ、醫者よ、藥よ、祈禱よと、種々いろ〳〵とうろたへて見ても、中々平癒せず。元來證の大元をからし、枝葉の證計を、大切に致す故なり。何程の藥にても治せず。元來、大元なる日月天地へ、不孝不忠の何程の祈念祈禱しても、み致し、大元をからす事を知らず。日月天地へ信を盡し、日夜廣

大なる御恩を感じ、信を以て勤め行ふ時は、其儘天に通じ即座に平癒致す疑なし。病によりては、醫道にては治し難く、或は疳癩癆痎の病、其外熱痢の病たりとも、此方に手を以て按撫致しさへする時は、即座に治るもあり。又五七度にて治まるも、或は一月二月にて治まるもあり。皆是等は眼の前に證據もある也。然れども、何も、此方の德も力も有るにては無し。なほる人の信が天に通じ、其所を以て治る也。是即天地の御治し被成る也（原文の儘）

彼れの敬虔なる信仰と、奇蹟的經驗を以てすれば、此の如き言を發するは無理からぬ事と察せらる（第一章事蹟及第五章宗教家黒住宗忠中「信仰の人」の條參照）

十一、實踐的教說

既に、宗忠が世界觀、人生觀の一般に就て述べ、彼れが如何なる思想を有せしやを知り得たり。然れども、彼れは思想家といはんより

は、宗教家なり。彼れは思想を系統的學理的に講述するの人にあらずして、道德を實際的に說くの人なりき。是れ、吾人が、茲に實踐的教說と題し、如何に彼れが宗教家として、道を說きしかを見んとする所以なり。勿論其多くは、既に述ぶる所と重復するの厭なしとせざるも、前者と相待ちて、一個の黒住宗忠を解するに於て、全きに一歩を進むるものならずとせず。更に、兎にも角にも、日本現社會の一事實として存する黒住教なるものを解せんには、吾人は彼れの實踐的教說を見るの大なる便あるを認めずんばあらず。

教の五事なるものあり。云はく、誠を取外すな。活物を捉へよ。陽氣になれ。我を離れよ。天に任せよと。これ、高弟星島良平なる人の分類する所。而して彼れは、更に活物を捉へよ、我を離れよとの教旨に對して、宗忠が平生の言說或は口語により、細目を分ち、一見頗る明瞭なるものあり。然れども、余は今直に彼れが分類にのみ

從はず、其項目につき、同じ思想を表はすものを、道歌或は書簡より摘出し來りて、之に附加せんとす。是れ未だ全部公表せられ居らざる彼れの思想を解するに於て、遺漏なからしめん爲めに當然採るべき義務なりとなす。今條項を分ちて、各數字の下に擧ぐるものは、星島良平の編列せる所にして、之に附帶して、同じ思想を表はし、或は說明とも見らるべきものとして、引證せるは、余が本研究に於て、彼れの書簡道歌等より擧げ來りしものなり。尙煩を避けんが爲め、黒住宗忠特有の用語中、一見他に解し難きもの、外は、敢て說明を加へず。

一、誠を取外すな

誠は天人の本躰にして、天地に遍滿せる氣なり。其誠を取外さぬは人となるの道。斯くして人となれば、天地は自由となる。彼いへり』

信心は、誠の心なれば、誠を守り、一字一點惡事をなさず、人には、兎も角も、天地へ對して愧づる事無き樣に、誠を取外さぬが信心の本躰なり、

と、同じ樣なる意を表はす語を列擧すれば

心の本躰は誠なり。

斯道は心の修業が第一なり。

天照太神の御心と、一躰になるが信心なり。活物なり。誠を取外さぬ樣に勤むるが、道の修行なり。

信心は誠の心、誠は〇辜ぞ。

二、活物を捉へよ

活物は天心なり、人心なり、活物を捉へよとは其明德を會得するの謂なり。活物は如何なる者ぞ。之を表はす語を擧げんか

天照太神は、萬物を生かし、悦ばしめ玉ふ。

神も人も、其活物は一躰なり。

活物は、息(いき)する物と言ふ事にて、人間は勿論、鳥畜類に至るまで、天照る神の御神徳が、二六時中に、鼻と口より通ひ候故、生き居らる。何と有り難く尊い事では御座らぬか。

誠を以て活物を捉へば、即天照太神と御同席御同徳となる。

心にたるみなき樣に、一心が活きると、人も活きるなり。

只斯ふして居る時も、未だ生れぬ前も、又やがて、躰が消失て仕舞ふたるときも、不生不滅なれば活物に別條なし。

姿を離れて、生物、幾萬年も生通しの所、請取られ候樣に奉存候」

即ち彼は、此宇宙の根源は、生ける物なり、永遠無窮に生命を有すものなりとなす。而して、吾人之を捉へて、同化せんか、吾人自からも此活物となるなりとなしぬ。扨然らば如何にして此活物を捉ふ

るか。彼れの所説は約して九ヶの項に歸す（數字の下に記せるが星島良平の編するものなり、之に附帶せる引證は余が擧ぐる所なり）尙「説明」といふは余が加へたる説明なり。（彼れの語の一見或は解し難きものあらんかと思ひて）

(1)、善人の罪を造るな

（説明）世に善人と稱する程の人は、多く陰氣にて氣を枯らし、遂に形を失ひ、天道是乎非乎の嘆聲を發すること頻りなり。天照太神の本心は生々にあり、陽氣にあり、徒らに悲しみ嘆くは、これ所謂善人の爲す所なれど愚たるを免れざる所なりと。

(2)、何事も活かし上手になれ

（説明）「人が惡事を仕向て來る共、此方にては、綿を以て受けよ」との彼れの語、正に能く此を説明す。他人と交際する時、何事もよき方へ取直して、人の心を殺さぬ樣にすべし。との意と思はる。

第三章　思想

道は、御一心の一つに御座候。何事も、御生かし被成候はゞ、皆生物と相成候。是天照太神の道に御座候。

(3)、難あり有難し。

(說明)如何なる患難困苦の憂苦に逢ふとも、本心を鎭め、氣を屈せず、有り難き一念を勵かさゞる時は、人の心を活かすものなり。

善惡共に難有と思へば、時々事毎に難有也。元來、此世に生れ來候を能く考へ候得ば、難有が、形の持前也。併、難を難と思はぬが我執行也。さすれば苦になる事なし。苦にならぬ時は、あとは樂み計なり。左樣なる心は、道より外になし。夫故、道に心住時は大安樂也。心一つにて樂みは勝手なり。

(4)、陰氣を去れ

(說明)生々は神の本領なり、陽氣は神の性なり。氣弱み、憂ひ悲

しむは、神の意に合はず。陰は「氣枯れ」にて、陽氣を枯らすことなり。神人合一の境に入らんとするものは、陰氣を去らざる可からずとの意か。彼れ謂ふ心氣を枯らすは天に對して大罪なり

(5)、御分心を痛めな

(說明)我が本心は、天照太神の分心なれば、造次顚沛にも、此本心を痛ましむる勿れ。何となれば、これ神に合せんとするには此上もなき障害なればなり。

(6)、邪陽に泥むな

(說明)邪陽は、心迷ふ時に信ずる倚頼神なり。心正しきを得ざる時、物に泥むは、人情の常なり。然れど、これ天地の活物を捉ふる所以にあらず。禁厭を施し、靈驗顯はれざる事ある時、心の煩悶上氣して、一心凝結するが如き、最も瞞まざる可からず

との意。

(7)、心の角を取れ。

(說明)心はもと渾然たるものなり、彼の語に從へば丸きものなり圓滿無礙なるものなり。心に角の生ずるは、心が形に引かるゝが爲めなり。これ神に遠かる所以。故に人欲を去り、物我の障害を排除し、直ちに丸き神と同じからざる可からず。と

(8)、息らず御陽氣を吸へよ。

(9)、下腹で息をせよ。

(說明)宗忠病治せんとする時、旭日を拜し、歡喜に堪へざるの感をなし、思はず太陽を呑みて、天地の靈機を感得す。而して彼れの考によれば、神なる精氣は、此宇宙六合に遍滿す、之を呼吸するは、即ち神の氣を體內に得、之と交通する所以の一なり。同じ意を表はすもの

御陽氣を下腹に納めよ。

天地と共に氣を養へよ。

毎朝生れ變つた心地で日拜せよ。

三、陽氣になれ

如何に彼れが之を解するか、次に引く所に由つて明なべし。

陽氣と申すは、本當の明りが入りて、諸事萬端爲す事、面白く樂むが陽氣なり。

陽氣にして、常に面白く暮せば、自然と活きて參る。陰氣にして僅かの事に迫り、是ては詰まらぬ、あれてはならぬと心痛するは形を枯らして死に參るなり。

形を保つは、氣一つなり。氣屈し、心散亂する時は、形保ち難し」面白いと申す事、自然と勤まり候得ば、一斯道は明りは入り申し候

心に明りの入るこそ、面白き本躰に御座候。

四、我を離れよ

「形は心の入れ物」なり。「入れ物計りを大切にして肝心の心を養ふ事を知らぬ」は、天心に遠かる所以なり。「悟れば心が身を使ひ、迷へば身が心を使ふ」。故に「我といふもの無き時は、乍恐天も我が心も、隔は無御座候なり」との趣旨に疑ひなく、兎角我より爲し給ふ事は、御形の爲、御心の爲にならぬものなり。

只々我を離れ被成候はゞ、自然と、天の惠みで何事も榮へ參り候御油斷はならぬぞ。

迷へば魔寄ると申して、人の心が迷ふ時は(即ち我に執着する時は)其處へつけ込て、惡魔が寄り集まりて、樣々の因果たゝりを致す。

形は假りの入れ物、心の活物を大切にして、之を痛めざる樣に行ふ時は、則大元父母へ大孝なり。

然らば我を離るゝには、如何に爲すべき乎。約して項目十條を擧げ得。

(1)、無欲になれ

道の修行は惜しい欲しいを離るゝか大事。

(2)、無念になれ

我といふもの無き時は、乍恐、天も我が心も、隔は御座なく候」

講釋は聞樣が大事、學者、高位、高官、知者、德者たりとも、其持前の物を捨て、學問の定規を離れて明かねば、合點行かず」

(3)、足る事を知れ

不足が起つたら裸て生れた昔を思へよ

(4)、天の御擬作を大切に勤めよ

(說明)士農工商各々天職あり。農は耕作を精出し、工は利器を以て其業をはげみ、商は商、士は士、各々其分のある所を勉むべきなり。

(5)、安房になれ

「赤子の心になれ」ともいへり。基督の「赤子の如くならずんば天國に入る能はず」といふと、全く同意義なり。尙他に

今年より三ッ子となりて天地の
惠に育つ神の懷
今年より三ッ子となるも難有し
赤子となれば尙難有きかな」

思慮分別さへ取のけば誠計り也」

腹を立てず、物を苦にせぬが道の入り口。人が惡を仕かけたら、向の地の中に黑の石が這入りた心でおれ。

(6)、慢心を去れ

(說明)八百萬神の神も、癖はあるものなり。

何程惡人でも、其よき所は、一つ二つあるものなり。

(7)、人智を去つて天に任せよ

(說明)有無生死に迷ふな。

形は煩ふとも、心を煩はすな。

贔負の引き仆し。

形を以て心を使ふ故、形の爲めに心を奪はれて、終には物を苦にし、或は煩ちひ、其處より、不生不滅の本たる活物の心を殺すなり。歎はしき事なり。

(8)、取越し苦勞をすな

(說明)心配しては、肝心の大元へ對して不孝なり。

心を苦しめるは、是れ不孝の至りなり。

養生は、一氣を屈せず、一心を品々に使はず。心堅固なれば、百病も來るまじ。病あれば、一氣を屈せず、一心を動かさずして、身を安んじ、よしと思ふ醫者に懸けば、藥も忽ち驗あるべしと疑はず、祈念し、我氏神樣を願ひ、其餘は一切天に任せ、心顚倒せず、一切苦惱を離れ、養生致しなば、百病も治まらぬといふ事ある可からず。

(9)、腫病を去れ

(說明)腫病と疑ひが去らねば、御蔭は顯はれぬぞ。

(10)、念を繼ぐな

(說明)念をつぐとは、私心より起る妄念をつぐといふ意。

本躰の心さへ、大切に養へば、身は自然と大丈夫になるものなり。

五、天に任せよ

天心を悟り、此方も其儘天心と一躰になるが、道の大本なり。

我を離れて天に任せよ。

何をするも、天に對してせよ。人に對してすな。

奇談の樣なれども、只一心に日月に打任せ奉り、天地一躰の心になれば、自然と天の道を得ること疑なし。

本を務めよ。

初念を大切にせよ。

袋入りをすな

物に呑まれな

彼の實踐的敎說の趣旨は、大躰以上の如し。此外に養心養氣の法を述ぶ。言はく

心は大磐石の如くおし鎭め（養心法）

氣分は朝日の如く勇ましくせよ(養氣法)

と。以て一般を推知すべきなり。

十二、對他宗教態度

彼れの說によれば、天地の根源は一元なり。八百萬神の根源も亦一躰なり。即ち「千百人も本は只一人なり」とは、彼れの絕對觀なり「神佛聖人といふも天地の誠の中に住める生き物」なり。隨つて、此等の大聖高德將た之れ等に由つて創められ、此等を祖となす宗教道德に對する見解は知るべきなり。大道は、自然道といふ名に迷ひ、明辨道に迷ふ人、其數知れず。

なる所なり

日蓮宗の根本義とする所、淨土宗の根本義とする所、上切宗教道德說の根本義とする所、其本や一にして、二にあらず。其入る所は異

なるも、其歸する所は終に一に歸す。彼はいへり。

一向宗、日蓮宗など、我法を自慢して、外の宗門や、神儒は何の益にもならぬ樣に思ふなり。是即法着といふ者にして、取るに足らず。

我を離れ、行ふ時は、佛道にては娑婆即寂光。神道にては高天原皆眞前に顯はれ、自然にけんせんたり。(玉鉾雜誌)

有無生死の四苦を離るれば、佛道の即身成佛。神道の神明の本の主也。儒道にては古への明德を明にするの場也。

即ち、容有的一元的見地に立てる彼れは、一切宗教(神儒佛)の根本は一にして只一つのみなるを信じ、各々自家の所說を得て是なりとなすは、法着なりとなせり。

第四章　彼れの思想上の傾向

吾人は、今玆に彼れの思想の、日本思想史上に於ける意義如何に於て述べんとする者にあらず。唯、如上述べ來れる彼れの思想が、他の諸宗敎に比して、多少特異なる點なきにあらざるを感ずるが故に其多少特異の傾向と認むべき點を列擧せんとするなり。而して、其列擧する所が天下全く此に似るものなしといふにあらざるは勿論なり。佛敎と基督敎と、如何に多くの點に、同異を發見し得らるゝよ。儒道と神道と、如何に多くの點に同異を發見し得らるゝよ。斯く考へ來れば、此の一つに對して、特異と認むべきもの、他の者に對しては全く類似のものならずんばあらずして、遂に特異となす者なからんとす。然れども這般の見解に對しては、吾人は、嚴正なる論議をさけ、暫らく漫然と看過せんとす。次に、吾人が認めて以て、彼

れに特有なる思想的傾向となすべきものを述べん。

一、彼れの思想は人生其者に對する非常なる若悶に出でざりしが如し。

酒池肉林、金殿玉樓、求むるとして得られざるなき、最愛の妻はあり、此世の最大の寶たる美子もあり。物質的滿足、一として得られざるなきに、生老病死の苦悶に堪へず、人生は苦なりと感じて、道に志せしは釋迦なり。而して之は獨り釋迦のみならず。多くの宗敎者の其道に志ずや、人生其物に對する苦悶懷疑よりせざる者は尠なし。今黑住宗忠を見、又道歌咏及信徒の談ずる所を聞くに、彼は直ちに人生其物に對する大なる苦悶懷疑に出でざる者の如し。其父母の死せし時の、彼れの慟哭も、哲學的宗敎的なる人生其者に對する苦悶ならずして、寧ろ人情的實際的なる孝養の至情に出づ。彼既にして病み、終に立つ能はざるを知り、死を決して從容とし、辭限

に至りて死せず。養心の法を凝思せしもまた必ずしも哲學的ならず。其間偶々一日感ず。陰氣にして身を痛むるは不孝の甚だしきもの、吾人、孝ならんと欲すれば大に陽氣ならざる可からず。と。後冬至の曉、東天に上る旭日を拜し、之を瞻下すと感じて、心氣遽に快活を覺えて、天地生々の氣を感得せりと云ふ。彼れの道に入るや、即ち斯くの如くして、其人生觀の根據も玆にあり。隨つて多くの宗教の如く、全般的に人生其者の無常を感じ、又は哲學的の懷疑の苦悶よりせしにあらざるを見る。勿論、彼が修養工夫、大に養心の術を考へしは、明なる事、更に彼れが一度道を說くに至りし以後に、人生の意義を求めんとしたるは、事實なるも、其思想の由來する所は必ずしも、哲學的要求より出てざりし如し。又假りに哲學的なりとするも、頗る實際的、倫理的なること上來述ぶる所によりて明なるべし。兎に角に其宗教思想の發起點に於て、吾人は宗忠と同樣なる

ものを見ること尠なし。

二、彼れの思想の由來は、歷史的繼承的ならずして、獨創的天啓的なり。

彼れは、佛教、儒教、其他當時の道德的、宗教的思想に、必ず其由來を負ふこと頗る少なし。小くも、意識的に、直接的に、在來の思想に負ふ所頗る少なし。此意味に於て、彼れの思想の由來は、歷史的ならずして獨創的なり。次に、彼れが自覺の光明に接せりとなす所以のものに由つて察するに、彼れは、人生を疑ひに疑ひ、苦悶に苦悶を重ねたる後、此に來りしにあらずして、偶然たる奇蹟的事實に由つて、天地生々の靈機を感得せり。即ち此の意味に於て、彼れの思想は、自發的又は自得的にあらずして天啓的なり。

三、現世的傾向

其道となす所を、宇宙の根源第一義に求め、其根本の神は、過現未

三世に渉りて、永久不變に同樣に此宇宙人生を支配すと感ぜし彼れは、天國と淨土とは、過去にのみあるにあらず、未來にのみあるにあらずして、現在にありとなせり。吾人は假りに現世的といふ。然れど、彼れに於ては、現世的といふの必ずしも適當ならざるなり。彼れの本旨は、永遠無窮に生ける天地の神と同化し了るにあり。即ち、嚴格に云へば、過去もなく現在もなく未來もなく此等三者を超越せるなり。多くの宗教の兎角に過去的又は未來的なるに比して玆に現在的の文字を用ふ（第參章參照）

四、彼れの思想は宗教的と云はんより。倫理的といふべきなり。極樂と天國とを、此世以外に認めず。過去と未來とに求めずして、直ちに吾人の心內に於て、現在のまゝに求むる彼れにとつては、此世は假りのものにあらず、眞のものなり。空の者にあらずして、實在なり。現在は現在の爲めにして、未來の爲めにあらず、過去の爲めにあらず。現在と現在の事物が、直ちに其れ自身に十全なる意義を有し、過去や未來と相關して、初めて意義を有し得るにあらざるに於て、通俗の意味に於て彼れの思想は、宗教的と云はんよりは、倫理的といふの頗る適當なるを思はずんばあらず。

五、樂天的

一切萬物皆これ天の造る所、人の如何とも爲し得る所にあらず。吾等は唯天命にのみ任せば、何の苦痛もあることなし。として、神恩の無限なるに對し、感謝にのみ滿ちたる彼れには、悲觀的分子の認むべきもの殆んどあることなし。彼はいふ

此世に生れたるが既に難有きなり

吾等は、只生々の德に滿てる神に任せんのみ。彼れ、神の心を推していふ。

面白きは御大心御心なり

神の心、既に斯くの如し。吾人之と同化する時、如何んぞ、陽氣ならざるを得んや。

心安く暮らすこそ高天原と存候」

天照す神の御腹に住む人は

寢ても覺めても面白きか那」

向ふこと皆御蔭かと思ひなば

寢ても覺めても難有か那」

即ち彼れには、人生は苦にあらで、樂のみなり。悲哀にあらで、歡喜なり。

惡しき事は。又善き事の肥しと思召被成候はゞ、是も亦樂しみに相成可申候。一切天に任せ候はば、苦になる事は、善惡共に御座なく候。

惡事も、凶事も、皆これ吾人をして道を修行せしむるものなり。神

に近かしむる所以のものなり。一切天に任せば、善も惡もなし。只面白きのみといふに於て、樂天的傾向の甚だ強きを見るべきなならずや。（靈章參照）

六、唯心的傾向、養心法の簡易なること

人生を苦と感んじ、樂と感んじ、鬼となし、邪となすは、皆心の正しきを得ると否とに存す、人間に於て、心は主にして、身は從、換言すれば後者は、前者の容器たるに過ぎざるが故に、吾人が此天地の神と同化せんには、只心本然の性を明にするのみなり。此心即ち不生不死の神の分靈が、同化して神となるに至つて、身も從つて生滅なきを得るものとなすが彼の本旨なり即ち彼れが人生觀は、此心に根據を有する唯心的傾向強烈なり。次に、吾人は彼れが宗教思想の眞髓なる神と同化する所以の方法、頗る簡易なるを認めずんばあらず。彼は言はく。天に任せよ、活物を捉えよ、我を離れよ、陽氣

第四章　彼れの思想上の傾向

になれよ、誠を取外すな、と。而して唯之れのみにて、敢て難行苦行を說かず、又之を爲さしむるが如きことを說くなし。吾人は、彼れの養心の說に於て、尚少しも困難複雜なるものを認めず。七、基督の所說と似たる點多し

其所說と、精神とが、全く相似たりとまで、言はんとするにあらず。其起るや、互に事情境遇を異にし、其唱導する神の觀念、また決して同一なりとす可からず。然れど吾人は、其宗教家的情感が、兩者相似る點尠からざるを覺ゆ。基督の道を說くや、言はく

是我れいふにあらず、神われにあるなり

と。宗忠いはく

己が心をはなれてとく時は、口ばかりなり。其時、何となく無心の所が、口に出づるなり。之則天のいはしむるなり。

と。基督

赤子の如くならずんば、天國に入る能はず

宗忠

又阿房になれ

又は

信心は、其御心に年のより被成ぬ模、萬事日月樣に打まかせ、何時までも小供の心を御はなれ不被成、日月樣を作恐親樣と思ひ云々

或は又

今年より三ツ子となるも難有し赤子となれは尚難有きか那

と。一切を天に任せと說くに於て、何ぞ情緒の相似るの甚だしき。基督の十字架上に刑せられんとするや、いはく

神の御心のまゝになさせたまへ

と。宗忠に於ても、吾人は此の如き意氣の切なるものあるを認むるなり。

第四章　彼れの思想上の傾向

誠に、先達ては、餘程相勝不申、大に御心配奉掛恐入居申候。其節段々御祈念被爲下、重々難有、小子は其時少も祈不申、只何事も天に任せ、此世に置て、入用なき小子なら、御引取となるべし、又世の爲めに、少しても相成ものならば、快よく相成と存候處、不思議に相直り候云々

彼れは、刑せられてまさに死なんとし、此は病に犯され、危からんとして斯の如き語を發す。信仰の至切なる共に一ならずとせんや。基督の、其神を信ずるの厚き、嚴乎として秋霜の感あり

それ、我が來るは、人を其父に背かしめ、其母に背かせ、媳を其姑に背かしめん爲めなり。

又

我よりも、父母を愛しむ者は、我に協はざるものなり。我よりも、女子を愛しむ者は、我に協はざるものなり。

宗忠の語る所、斯くの如く烈しからざるが如きも、又中々に、峻嚴なるものあるを認めずんばあらず。

道は生通しに相違無御座候得共、如何樣に諭し候とも、得聞取らざる人、尙誠を勤めざる人は、親子兄弟とても致方無御座候間、此處能御合點可被成御事に御座候

尙、兩者の相似を一々に擧げ來らば、數へ難しとせず。然れども大體以上に述ぶる所に由つて、兩者が意氣の或る一面に相似るもの多きを解し得ん。吾人宗忠の思想を考案して思へらく、若し彼れをして、今日にあらしめ、基督敎に接せしめん乎、彼は少くも、聖書の半面を最も能く解し得るの人なりしならんと。尙牧放浪氏は、其造詣深き陽明學を通じて、王陽明と宗忠の相似る點を列擧して說明を加へられたり。之を見るに、また首肯すべき節少からず。然らば、吾人、若し陽明學に通じたらんには、此にも相似の點を多く見出し

第四章　彼れの思想上の傾向

たるならん乎。推して、他の諸聖賢と比す、また各々相似る節を發見し得たらん。實に某氏は、宗忠と日蓮を比較して、兩者の間に思想の感應ありと論せられたりと聞く、人各々其好み又は親む人を從へ來りて、彼と比するを見れば、彼は、何人にも、兎に角一種の傑物と見ゆと覺えらる。然らば吾人が基督との相似を說くは、蓋て聖書の一端を讀みたるに由るものか。

第五章　宗教家黒住宗忠

吾人は、既に彼れの思想の一般を述べ、其特異と認むべき傾向を擧示ぜり。之に由つて、吾人は思想家としての黒住宗忠を研究し得たりといふべし。然れども、吾人が、尚性格其他に就て多少の吟味を加へざる可からず。是れ、吾人が、初めに彼れの事蹟の一般を述べ、次に其思想教說を述ぶるに、煩はしきまでに彼れの語を引證したるに拘らず、更に蛇足を添へ、一個の宗教者としての彼れの意氣を見んと欲する所以なり。

一、大自覺者

道とは何ぞ、天照大神にあらずや。圓滿にして無礙、不生不滅、永遠無窮に、此六合に遍滿せる天地生々の一大精氣にあらずや。儒と、

第五章　宗教家鼎住宗忠

佛と、聖と、賢と、其説く所異なるも、其歸する所は、終に一つに外ならざるは前章述ぶるものに由つて明なり。而して吾人若し一度此一物を捉へんか、我はこれ最早一個有限無常の塵塊にあらずして、天地と共に生くる神たるなり。

道は、誠に勤め安き物なり。其勤といふは、道に住む事也。其道と申すは天照太神也。則丸き御道也。○きに奉住もの也。其任す事、安き事也。唐も、大和も、是まで其處が氣の付かぬ事の不思議なる事也。其道を離れぬが、我説く所の道なり。誠に一筋の道が常の道也。其道程世に有難き事は御座なく候。

然り、彼れ謂ふ。此道に入り、天地と共に永久に生き、生々安楽ならんこと、真に易々たるの事のみ。然るに、世人此第一義を知らず、迷へるか那。我、今神德の無限宏大を知る、如何ぞ此福音を述べずして可なるべきぞ。

天照す神の御德を世の人に
　殘らず早く知らせたきもの」
己れも活き人もいかして天地の
　誠の中に遊ぶ樂しさ

彼れは又いふ

古の心も形なし、今の心も形なし。心のみにして、形を忘る時は、今も神代、神代今日、今日神代、世の中は、心程づゝの事なり。心が神になれば即神なり。

世人は、何故に、這般明瞭の大眞理を悟り得ざるぞ。彼は直ちに語をついで言はく

此左京（彼れの名）が瀕陷をいたす皆々付て御出なされ。

と。是れ、初めて天地の大眞理を喝破したりとなす自覺者の聲に非らずして何ぞ。また

第五章　宗教家黒住宗忠

「古たうとき人の御歌にかへし奉りて」と題して、

日蓮が

月は入り日の今出づる曙に
　己れこそ道の知るべなりけれ

といふに、唱和して、彼れは歌へり

月は入り日の今出づる曙に
　我れこそ道の初めなりけれ

我こそは、此道の先覺者なり、眞理の大喝破者なりとの意氣を見るべからずや。老年一日威じてうたへるに

死にはせぬ何處へも行かぬこゝに居る
　尋ぬる人のあらば答へん

と。篤實温厚の君子にして、此豪膽不敵の語を發す。吾人は、彼れが「我は福音の先覺者たり」てふ大自覺に達せしを拒否し得ざるなり。

彼更に任ずらく。抑も他は、我を以て何とか見る。一度此大自覺に達せし我は、最早一個の人間にあらず、「天照太神と御同席御同德」の人、即ち神にあらずやと。見よ。弘化二年三月八日、彼れ兒島より歸らんとし、舟をやとひて兒島灣を渡る。時に遽に風起り、舟將方に覆らんとす。時に彼れ大喝して、

浪風をいかで鎭めん海津神
　天つ日を知る人のりしに

と。其意は。何者ぞ、天照太神を知れる者の乘れるに、敢て此狂暴をなすといふにあり。海神を叱咤するの意氣何ぞ夫れ豪宕なる。講釋の說き樣に就て逃べて言へるあり。

己が心を離れて說く時は、口ばかりなり。其時、何となく無心の所が口に出づるなり。是則天のいはしむる也。

これ、基督が「われを見し者は父を見しなり、何ぞ父を我儕に示せと

言や、われ父にをり父の我に居ことを信ぜざる乎われ爾曹に語し言は自ら語しに非ず我にをる父その行をなせるなり」と言ふと同一徹にあらずや、實に彼れは一大狂者に非らずんば、一大自覺者なり。

二、信仰の人……一切を天に任す

神恩の無限に感じ、一切を天に任すに至つて、有限微小の人間は遂に有限微小の人間にあらず。生と死と、盛と衰と、はた何者ぞ基督の「神の御心のまゝになさせたまへ」といふものは、また彼れが信仰なり。

既に、先達ては餘程相勝不申、大に御心配奉掛恐入居申候。其節少々御祈念被爲下、重々難有。小子は其時少も祈不申、只何事も天に任せ。此世に置て入用になき小子なら、御引取となるべし。又世の爲に、少しても相成ものならば、快よく相成と存候所、不

思議に相直り候のみならず。初より、まじなひどもは奇妙成事甚多く、全く御蔭と奉存候。

我れ、若し、世に不用ならんか、神は我を捨てざる可きなり。生と死とは、全く神の命に惟れよる、我は只一切を天に任せんのみなり。かくて病みて別に「祈り不申」といふ、神を信ずるの厚きを見る可からずや。彼れ、道を說き、教に歸するもの漸く多からんとするや。人頻りに其說を書にせんことを勸むる彼れ言はく、若し我道果して天理にかなひなば、敢て區々斯くの如きことを爲すなくして、道は自から天下に布かん。若し然らずんば、如何に之をつとむるも、何をか爲し得んと。而して終に之を書にして公にするを肯んぜざりしといふ。また人の、京都に來りて傳道せんことを勸めたる時も、我神は天地に充滿す、我が說取るべくば、必ず他より來るべしとて之を辭せり。

第五章　宗教家黒住宗忠

天に任すの情眞に深且切なるを見るべからずや。次に這般の胸中を語れる書簡の一節を擧げん。

道も、何とやら、開口にも相成可申哉と奉存候。さる人、書物に致し世に廣め度よし、此節其氣さし出申候。然し大分たい氣成事にて、出來仕得ば宜敷御座候が、是も天命次第と奉存候。小子は、少しも望は御座なく、皆天命に打任せ居申候」

善惡共に天に打任かせ候得ば、少しも望みと申者無御座候」

某年某月某日の事なり。岡山九山宗源寺の祭禮あり。宗忠此日出て岡山中の町御門を過ぐ、酔漢松尾長三郎といふあり、刀を抜き、數人に斬りつけ、走つて其家に歸らんとす。道に宗忠にあひ、又も斬りつけんとせり。宗忠つゆ驚く景色もなく、一喝一聲御場所柄で御座ると叱責せしに、酔漢は慙き走り去り、彼れ事なきを得たり。既にして、事を聞つけたる人、來つて彼れを問ひ、其悉なきを祝し、

彼れが神色自若たる所以を問ふ。彼れ即ち其胸を指して言はく。

此れを殺して居りますから、ナー

と。既に我を去りて、天に從ふ、何の驚愕恐怖かこれあるべきぞ」

道は、則天照太神也。其道に心をすまし候上は、外に求むる道なし。難有は小子也。今迄何度も、あやうき所を遁れ候。其故、只今の考にては、道にさへ居申候時は、毫に〳〵少しも恐るゝ事無御座と奉存候。時に一首

天照す神の宮居に住む人は
限り知られぬ命なるらん

彼れ、昔て出でゝ津山にあり。一子宗信、病みて急なり。家よりの使者走り來りて、事を彼れに告ぐ。彼靜かに祈り、陽氣を吸ひ、其使人の手に吹きかけて言はく。これ神の御氣なり、彼れに此氣を觸れしめよ、病忽ち治せんと。彼れは夫れ迷信者狂者か、はた一切を

天に任す信仰の人か、其何れかならざれば、かゝる事普通の人の爲し得べき事にあらず。

三、學者に對する痛罵

カントの神に對する信仰、さてはフイヒテの大我の信仰の如きは、基督の神に對する信仰、釋迦の涅槃に對する信仰と、其偉大なるに於て何の遜色あるべきぞ。吾人を以て見れば、哲人と宗教家と、其根本信仰が偉大雄渾なるは同一なり。例令へば、スピノザの如き、王陽明の如きは、哲人にして又眞個の宗教家と名づく可きにあらずや。今此に、宗教家として宗忠を觀察し、其學者を罵倒せる宗教的精神を見んとすといへども、其學者と云ふもの偉大なる學者をさすにあらずして、所謂平々凡々、徒らに書を讀むも、精神を汲む能はざる凡俗的學究を指すや勿論の事なり。

宇宙の第一義、人生の根本的活物を捉へたる宗教家に取つては、宗教は人生の事實にして、座上の空論にあらず、學者の理論にあらざるべし。かくて其福音に據りて人を救濟し、道に導くは、彼れの生命なり、使命なり、唯一の義務たるべきなり。此意味よりして、眞の宗教家たらんものには、區々小事に齷齪たる學究は、眞に憐れむべきものならん。否學者が小理屈を講じ、小智を弄して人生の能事終れりとなすは、人道の敵なり、此世に於ける最も大なる罪惡たらんなり。學者とても、其研究眞に深甚の境に入らんか、又必らず偉大なる信仰の人とならん。而して此境に入りて、凡俗宗教家を見んか、眞に憤慨に堪へざるものあらん。そは、今別問題として、兎に角に、宗教家なるもの眞に其信仰の極致に達したらんには、彼れの眼には、學究なるものは如何に憐れむべきものなるよ。故に余は多くの場合に於て、宗教家が學者に對するの態度如何は、推して以て

第五章　宗教家鼎住宗忠

其人の眞の宗教家たりや否やの標準たり得べきを信ぜんとするなり。即ち玆に宗教家として、宗忠が學者に對する見解を述べんとする所以なり。

御道御執行心の程は感心仕候得共、理を以て御穿鑿よりは、我を離れて誠を勤むる事、第一に御執行被成度候

徒らに、空理空論を以て神を信ぜんとするは、大なる過誤なり。神を知るは、理のみによるに非らず、信仰によるなり。宗教は空談にあらずして、事實を見ざる可からず。講釋の聞き方に就て述べていふ。

講釋は聞様が一大事學者、高位、高官、智者、德者たりとも、其持前の物を捨て我をはなれ、一心に成て御聞なさらずては聞へ申さず。

又

面々の智惠を捨て、學問の定規を離れて聞かねば、合點は行かず」といふに至つては、これ學者に對する一大挑戰を試むるものにあらずや。而して、彼れは此に止まる能はざるなり。其熱涸き情激する時は、平生の篤實を捨ていい嘲罵に近き憤をもらすことあり。

（前略或る時、學者多く集合の席にて、世の中の罪人の張本、親殺し主殺しよりも、甚だしき背理なる罪をいふ哉と尋ねしに、講釋の席なれば、誰とて答ふる者なし。斯かる罪人は、今時の學者なり。書籍は數千卷讀むといへども、其奥義の肝心なる天地を悟る事能はず。孔人の語に、君子は本をつとむ、本立て道なるの道理を明きらむる事なし。元と申せば、五常の道を守り、君に忠、親に孝、夫婦兄弟朋友の言などと云ふ事を信の本と心得て、天地の間に神もなく、佛といふものなしなどと、押極めて、一切衆生の人々を迷はせて參る罪、之より大なるはなし（至誠講義）

第五章　宗教家鼎住宗忠

第五章　宗教家鼎住宗忠

尙彼れが、斯く語ることは一度や二度に止まらざるなり。今、一々之を列擧せず。斯くの如きは、是れ學者に對する大なる痛罵にあらずや。眞の宗教家が、平凡なる學究に對する正當なる痛罵にあらずや。

何をするも天に對してせよ、人に對してすな」

これ人と人との關係のみを見て、其以上のものを看破し得ざる、凡々たる學究の語なりや。

神は、生涯しに相違無御座候得共、如何に諭し候とも、得聞取ざる人、尙之を勸めざる人は、親子兄弟たりとも。致方無御座候間、此處御合點可被成御事に御座候、

これ、宇宙の第一義を捉へ得ざる學者の聲として出づべきや。「如何に諭し候とも、得聞取らざる人、尙之を勸めざる人は、親子兄弟たりとも、致方無御座候と、これ、當時の我日本の學者、少くも多く

者が、發し得る言なりしや。秋霜烈日直ちに天を衝く底の意氣を見る可からずや。これまた。基督が「夫わが來るは、人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、媳を其姑に背かせんが爲なり、我よりも父母を愛む者は我にかなはざる者なり、我よりも子女を愛む者我に協はざる者なり」といふと同じ精神ならずや。眞に凡俗學究を驚倒せしむるに足る。

四、雄大なる抱負

既に述ぶる所に由つて、彼れが氣燄と感慨との一端を知るに足らん。次には、他面より彼れが抱負の大を窺ふべきものなきにあらざるが故に、更に駄足を添へて、本章を終らんとす。彼れ歌ふ

○我元の姿を尋ぬる
我が姿尋ぬるに亦及ぶまじ

第五章　宗教家黒住宗忠

たゞ天地に照り渡るもの

又いふ

天地を我が身の上と思ひなば

雨降らば降れ風吹かば吹け

○

天地に劣らぬ程の生物は

己が心と思ふうれしさ

有ものは皆吹きはらへ大空の

即ち天地は我が物なり、我は直ちにこれ天地なり。雄渾の高調なり。

無きこそもとの住家なりけれ

道に御任せ被成候はゞ、天命に安心の所も自然と出来申し、

天に叶ひ不申は致方無御座候。道に入り玉ふ人は御一生の御事計りにあらず、天地あらん限りの御事也。

彼れは思惟へり、吾等が事業は、短かき五十年の、夢の如き生涯の為にあらざるなり。永久無遠の此天地の為なり。彼れの抱負の大を思ふべきなり。

天照大御神を、御主人御親とも思ひ候はゞ、不束なる心は出不申候。

彼れは又述べたり

浮世の宝と申すは、金銀ほど結構なる宝は無しといへども、今人に千貫目、或は十萬石の知行を遣はそうと云ふならば、悦ぶべし。乍併、其千貫目或は十萬石を遣る代りに、其方の首を切て渡せと申さば、一切て渡すべきや世の宝の最上とするは則命也。其命なくては、千貫目の金、十萬石の知行もいらぬなり。其千貫目の金よ

第五章　宗教家黒住宗忠

第五章　宗教家黒住宗忠

りも、貧乏の首にても、其首の方が入用也。其貧窮の體にても、此道に入つて參れば、自然誠の活物を得て見れば、千貫目や十萬石には目はかゝらず三千世界が我が物となるなり（至誠講義）

此天地の誠を捉へなば、富貴夫れ何者ぞ、功名利達何者ぞ。「千貫目や十萬石には目はかゝらず、三千世界が我が物なり」即ち彼の財産は、實に此天地なり。彼れが名譽は、此絶對の神と同化することなり。

此財産と、此名譽あれば人間は小功利、小榮譽に齷齪たる淺間敷心の出づべき筈なし。氣を吐き來りて虹の如きも、此に至つて盛なりといふべし。傳へ言ふ。彼れ壇に上りて講を開くや、朗々たる其聲、數町の遠きに達し、行人をして其何たるかを停まり聞かざるを得さらしむと。又其語るや、斷々乎として喝破し、些かも礙滯することなく、威風眞に堂々たりしと。吾人、今彼れが歌を讀み、書簡に接して其人を懷ふに、兎に角一個の信仰に生ける宗教者を思はずして

止む能はず。彼れが語るに、學者の如からずして、權威あるもの、如かりしといふ、蓋し異なりと覺えらる。

第五章　宗教家黒住宗忠

第六章　逸事餘聞

宗忠の事、上來述ぶる所にて其一般を盡せり。されど、讀み返せば、筆の足らずして彼の人物を偲ばしむる能はざるあり。或は書き落したるもあり。或は聞き漏らしたるものもあり。或は、意味の充分に通じ難き節もありたり。書き直せば、全部書き直したくもあれど、そは出來難き事として、責めてもの心遣りに、逸事餘錄を附加して、不足の一部を補ふことゝいせん。

◉牧放浪氏に映じたる黒住宗忠。數年前迄は予も黒住教と天理教との間に、幾何の徑庭あるやを疑ひ居たる者の一人なり。其後王陽明の良知說と黒住教の至誠論と、全く其の揆を一にするものあるを發見し、教祖宗忠の人格を詳にするに及び、始めて黒住教の天理教、金光教等と同一視す可きものに非ざるを確信せるなり。宗忠は宗教

を離れ、單に一個の實踐道德家として論ずるも、優に近江聖人と比肩し得可き一偉人にして、其の氣宇の豁大なる識見の卓絶せる、藤樹先生をして後に瞠若たらじむるに足るものあり、其生れながら神と爲る可き大抱負を懷きながら、神と爲らんと欲せば先づ人と爲れよとの敎訓を遵守し、行必ず篤敬言必ず忠信たらんことを努め、後に天人不二、幽顯一致の妙諦を靈覺し得たる、今日五十餘萬人の信徒を有する黒住敎敎祖宗忠大明神として、崇祠嶷然今德日に新なる所以なる可し。（牧氏著黒住宗忠）

◉犯す可からざる威嚴を備ふ。宗忠が犯す可からざる威嚴を備へしは、本書を讀む人の容易に想像し得る所なり。今更、繰說するの要なけれども、牧氏が其著に記せる左の一事は、余の聞き漏らしたる所、彼を想ふて興を覺えしめんに拜借せん。

黒住氏は素武門の家にや有りけん、黒絲縅しの具足一襲と緋房の陣

笠とは、黒住家傳來の一什寶として今尚之を珍藏し、正月十一日を以て具足祝を爲すの家例あり、鐵製甲の裏面には、正平六年六月と彫りつけあるを見たり。宗忠の帶刀も備前吉光の業物にて、何事にも誰讓卑下を主とせし彼れも之れのみは最とほこり顏に、折々水も滴らんばかりなる中味を拔き放ちては、ためつすがめつ、「田舍武士には過ぎた刀でムうがな」と云へりとか、森下景端も其の後宗忠の帶刀を一見して、頻に其の名作なる由を賞贊し居たりとぞ、宗忠の平生を知るものは春風駘蕩人の面を吹くが如き中にも、犯す可からざる一種の威嚴を備へ居たるを想像し得るならん、其の溫乎玉の如かりし彼れが晚年の德器は、五十年間修養に修養を積みて、磨き上げたる結果に外ならず、少壯時代の宗忠は其の二兄と同じく剛氣を帶び任俠を負ひ、朱鞘の大刀をも橫へ乘ねさじき氣慨家なりしなり可し。彼れが後年生ながら神と爲らんとの大勇猛心を奮起し來れる

は、此の家系と士魂とに負ふ所尠からざる可き歟。

◉修養工夫を積みたる人なり。余は思想上の傾向を述ぶる章に於て、彼の思想が天啓的なりといへり。其意味は彼處にも述べたる如し。而して、之を以て、彼は寢て果報を得たる者となす勿れ。彼は二十歲の頃より、既に神とならんとの大勇猛心を起したり。之に由つて見れば、彼は、中々に修養工夫を勉めたる人なるべし。病中にも、養心の法を講じ、遂に頓悟に出でたる、而して其結果、病氣も全快せしといふが如き、中々に異つた人なり。宗忠の「天命直授」を觀察せんとする者、這般裏面の消息を看却す可からず。

◉盛に禁厭を行へり。禁厭によりて、宗忠が人の病を治せしに、其靈驗著しきの評判廣く仰はり、後には盛に彼の所に來りたるが如し。彼は、禁厭によりて病を治し、其より次第に彼の道に導きたるが如し。當時如何に彼が盛に之を行ひしかは、彼が瀧の山伏や、醫者よ

り反對を受けしに由りて其一般を徹し得。而して、かく禁厭を行ひしも拘らず、彼が財を貪り、利に走らずして、ただ夫れ大道に導かんとせし爲め、後には反對者よりも賞揚せらるゝに至りしは、彼の德高きを窺ふべし。余はもと、禁厭なるものの功果など信ずる能はざるもの、然し、信仰の力にて、病氣などは治する者なることは、或る程度まで之を信じ得。隨つて宗忠が禁厭にて人を治せしといふもの、之を信ずべきなり。然し、彼が如何なる程度にまで行ひ、如何なる程度にまで其實蹟を擧げたるか、十分なる研究を積む能はざりしを怨とす。禁厭に就て、心理上よりの判斷を試みんは、興あれど、今は述べず。只何人にても、かゝる事を行ふの權威あるべきかは大に疑なき能はず。

◉入門の手續　宗忠が大道を宣傳するや、次第に其道に歸するもの多くなれり。而して入門する者は、神文を認むるを常とす。宗忠は

之を受けて、門人名簿に記入す。神文といふもの、別に形式なきが如く、大抵次の樣なるを例とせり。

此度聖道御授被爲下、向後抽本心御敎守可申候、於是相背者日月星の可蒙御罰也、仍神文如

と記し年月日の下に己れの姓名と華押を認め、宛名は黒住先生樣とす。

◉彈壓迫害　彼れの時代の岡山藩は、淫祠邪敎に對しては、其取締中々に嚴重なりき。日蓮宗の不授不施派の如きも、痛く迫害されたり。此間に立ちて、彼れ一新宗派を開き、中々の影響を與へしに拘らず、遂に何等の迫害を受けざりしは。吾人の注目を怠る可からざる所なり

◉沈默の雄辨　下らぬ事恐圖〳〵述べんより、何事をも述べざるがよきは、勿論なり。殊に宗敎家道德家などいふものゝ、場當り演說

や、凡理づくめの講説などは、中々に聞苦しく、喫舌つた爲めに、感化を與へずして悪感を與ふ事勘からず。宗忠は、或時は壇に上りながら「今日は何も申す事は御座いません」と言つて其儘下ること あり。或る時は、二三四五人の聽集にも拘らず、數時間に渉る雄辨を振ひたること屢々なり。而して、何も語らずして壇を下りながら、聽集に一方ならぬ感奮を與へしとぞ。

◉滑稽傳道ならず　黒住教は、未だ我が國の全部にすら遍布し居らざる程なれば、其の海外布教に着手するの餘力無きは素よりなれど、已に亡命客として一時我が國に飄零し居たる安嘗齋の如きは長崎に於て始めて黒住教に入り、後備前大元に來り熱心に其の教理を研究し、將來韓國に於ける黒住教布教の先鋒を以て自ら任じ居たるを、一朝政變の犧牲となりたるぞ無惨なる。此の外にも朝鮮人中には往々黒住教を奉ずるものある由なれば、韓國布教は今後同教の先づ其

の手を下す可き好版圖たる可し。河上忠晶は宗忠が天照大神の道は獨り我が國の私す可きものに非ず。普く坤輿の上に宣傳す可きものなりと云へる遺志を體し、先づ同文同種なる清國より着手す可しとの見地より、宗忠の教義を漢文にて祖述せるもの、其の家に傳はり居れり云々。（牧氏著黒住宗忠）

◉至誠神に通ず　宗忠ある日朝起きて不圖屋根裏を見しに、一種々々焦げ居たり。尚諸所を見たるに松明の殘りさへもありたり。之を見たる彼は、深く其心の迷へるを憐み、燃殘りの松明を神前に備へて、其人の本心にかへらんことを祈り居たるに、三週間程經て、放火せんとしたるもの、來り深く其罪を謝し、心底より先非を悔ひたれば、大に悦び、其道を說きて信者とならしめたりと。蓋し其初めは、彼の盛名を忌みたるものならん乎。

◉人の美所を賞揚す　春風駘蕩は彼の性格の大部分なり。彼れが他

人と交はる大抵皆これ。其家人を遇するも、然りにて、僕婢の如きものにても過失をば咎めずして、其美所をのみ認めて、之を賞揚せしといふ。僕婢などが、一度彼の家に來りて、十年二十年或は一生を暮らしたるが如き其平生を察すべし。

◉簡易素朴の好老爺　宗忠は屢諸家よりの請待に應じ、岡山に出てゝ說敎と禁厭とを試みたるが、雨降りなど道惡き時は、下駄を携へ跣足となり町はづれ迄徒歩にて行き、路傍の小河にて足を濯ぎ、此處にて初めて下駄を穿き、招かれたる家に到りしとぞ、時人より神の如く尊重され乍ら、自ら持することの簡易素朴なりしこと概ね此の類なり、好老爺の面目眼に見ゆる心地す、宗忠は斯も儉素なりし平面に於て、餘財あれば貧者の賑恤に努め、扶持米の如き大方は貧しき隣人を霑濡するの料たりきと。（牧氏著より）

◉黒住の袋入り　彼の思想によれば、神道にても佛道にても、儒敎

にても、凡て、大道の根本を捉へなば、最早論なき所なるなり。豈に佛とのみいひ、聖覺とのみいふ可けんや。彼れ嘗て誡めていへり。近頃私へ隨心の御方動もすれば、私に目を着け、黒住〳〵の道と唱へ、儒佛などを誹謗するは、黒住の袋に這入りたる者なりと。

◉權門に趨走せず　岡山藩士中には宗忠の門人尠からず篤信者も多かりしかば、藩主の面前にて道を講ぜられたしとの內意を傳へたるものあれど、未熟にて左樣のことは思ひも寄らずと、體善く之を辭し居たるに、强て登城を勸めらるゝに及び、自分の說く所若し藩主の御心に叶ひ、御道御信仰を得ば、結構は結構なれど、之が爲今日は御本殿、明日は西の丸二の丸、または觀彰院（藩主御叔母君）または丹波守殿（池田家支封）信濃守殿（同上）其の他諸家老等、其れより其れと請待さるゝことゝもならんには、一般の講釋が忽になる可ければ、此の儀丈は眞平御免ありたしとて、登城の儀は沙汰已

みとなりたり、何處迄も平民の友となり、權門に趨走せざりし、宗忠の心ばえこそ尊けれ。（牧氏著より）

◉痢病患者を治す　宗忠の二女の櫻井喜馬太といふに嫁せるの談に、或る日の事、天刑病者來り、禁厭を乞へるに、父は、叮嚀に呪ひたるに、兩手のみならず、身躰各所にも血濃附着せり、母上は之を憂き事に思ひ、神前に出るお身なれば、身體丈は、清潔にせらるべしと言ひたるに、治して遣りたき外念なし、血濃が附く故などを心配しては、禁厭も効なかるべしと言ひたり。其後、彼の患者は、病氣全治せりと。眞僞判明せざるも、彼が斯る病人に對しても、同情の深き事は推知せらる。尚此種の奇蹟的事實の傳へらるゝもの少からず。

◉萬道の奥義を敎ふ　宗忠が劍道の極意を悟らしめしこと、事蹟を述ぶる章中に、片山某の事につけて述べをきたり。彼れ自身は、勿

論劍道の巧者にはあらざりしも、人生の奥義を握り居たる彼は、諸道の士を感々服々せしむるの言を、直ちに胸底より吐き來りしが如し。或る時、岡山藩の御馬役一森彦六なる者宗忠が萬道の奥義を敎ふると聞き、馬術の極意を聞きたしと申入れたるに、先づ馬に乘りたまへといふ。彼れ馬に乘り、如何にも得意氣にて、如何御覽ずと尋ねたるに、宗忠は、「如何にも御上手なり」と言ひけるに、上手には物足らず、更に御批評をと言ひたるに、宗忠は、馬にお乘りなさるてなしと答へければ、彦六は初めて、鞍上に人なく鞍下に馬なしといふ馬道の秘義に觸るべきと氣付きたりといふ。此外劍道其他の士にして、熱心なる彼の崇拜家となりし人少からずといふ。

◉インスピレーションの人　宗忠が道を說きて、聽集次第に多くなるや、彼は日を定めて講釋を開くに至りしこと既に述べたり。而して彼は、定日には必ず出席して之を缺がせし事なし。而して、彼が

病氣の時など、絶食をなせし程なるに、講釋は缺がせし事なく、或は看護人に助けられて、漸く墳に上りし程なるに、一度口を開きて、說き出すや、音吐朗々、雄辯滔々、說き去り說き來りて光焰翼に萬丈、インスピレーションの權化身なりしとぞ。

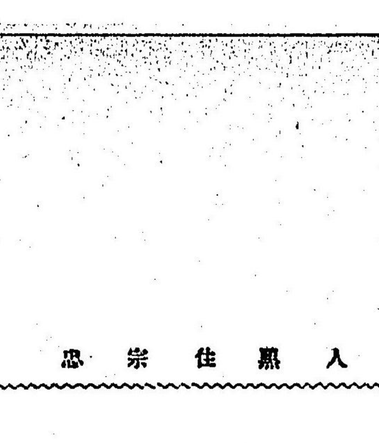
◉感化追劍に及ぶ　或る時、夜更けて、庭瀨より歸る際、一人の追劍出て來りて、命が惜しくば、金十兩を出せと迫りたるに、彼は其時持合せとては五兩しか無かりしより、此丈を與へ、餘の五兩は、宅のかく〳〵の所の手洗鉢の何れの邊に埋めをくべければ、來りて之をとれと言ひて、其名と住家の位置を語りて去りたり。其追劍は好奇心に驅られて、彼の宅に忍び入り、示定の場所を掘りたるに、果して金五兩ありしより、大に之を慚ぢ、其罪を謝して、遂に熱心なる宗忠の信者となりたりとぞ。

◉日の丸の旗の創案者　宗忠は、敎旗として、日の丸の旗を用ひたりき。維新に至りて日の丸が、我國旗となりしより、黑住敎は之を廢して、日の丸の中に敎の一字を白書するに至りしとぞ。勿論、彼が國旗の創業者にはあらざるも彼が日の丸の旗を用ゐしこと、與ある事どもなり。

◉維新の大業に與る　宗忠は純然たる宗敎家を以て終れり。然れど、彼はまた世の大勢を解せざりし迂愚宗敎家にはあらざりしが如し。彼は確に時勢の變遷を洞察するに一隻眼を有したりき。彼れ嘗て其在世中に豫言することあり。世の中が一變して將軍もなくなる。國守大名もなくなる。四民平等となる。佛道も衰へ、儒道も衰へ、神道も微になる。と。其門弟中には、赤木忠春の如く、幕府の權勢赫々たるの時に、忌憚なく王政復古を論じたるものあり、或は赤木翁豐春、櫻井右源治等の如く、京幾地方に入り、公卿志士の間に出入し、勤王の說を唱へたるもあり。或は、牧野權六郎、伊東有涯、森

第六章　逸事餘聞

下景端星島良平等の如く岡山藩中錚々の勤王家も出でたり。然れば、宗忠はまた、維新の大業に與れりといふて不可なき乎。



第七章　黒住教史

黒住宗忠の思想が、其歿後に於て、如何なる影響を與へつゝあるか即ち如何なる人々の間に宣布されつゝありや、布教に從事する人々が、如何なる人々なりや。宗忠の思想が如何に受容されつゝあるか等を精確に檢證し來らんには、興味ある事どもなり。余は之に就て十分の討尋を試みんと欲せしが、黒住教本廳に於ても目下材料整理中にて直ちに借りて系統を附するに容易ならず。多くの事は、何等の秘するなく吾人に語られしも、不幸正確なる見解と稱すべきものを綴る能はざりき。因つて今は、宗忠なる一人格が、約幾十萬人の崇拜の中心點たるかを述べて、兎に角彼が偉人なる一人格なりしかを偲ばしむるの一助となすに止めん。

宗忠の沒後、高足の門人は、各地に布教して頗る感化を與へたり。

就中、京都に於て、赤木忠春其他が、大明神號の出願裁許を得るに努めたるは看過す可からざる所なり。彼等は公卿の社會に出入し、其結果、二條、三條、九條、六條の如き諸縉紳、彼の道に歸する者多く、神祇管領長吉田氏の如きも、彼の道を信ずるに至れりと。之が爲め、安政三年三月八日には宗忠大明神の神號を取扱はれ、京都吉田神樂岡に、宗忠神社を建營し、後、事以聞して慶應元年十二月三日勅願所被仰出、全二年二月七日神階宣下ありしこと既に述ぶる如し。其他安政五年四月朔日、九條關白尚忠が、黒住宗篤を召し、七ヶ條を捧げて、祈禱を頼み、幕、提灯等を寄附し、染筆の神號を下附し、且つ高足門人の舘入りを許されしが如き、更に諸國の藩主が神文を捧げて、道を聞くものあるに至りしが如き、決して雲烟視す可からず。

京都以外にて、其後今日に至るまで、同教徒が力を盡して傳道に從

事せしは、山陽、山陰、四國、九州にして、岡山、因伯、愛媛、大阪、など最も盛なりと稱せらる。尚同教が、今や全國各所に其種子を蒔きつゝあるは、此種の事象に注意せる人々の汎く知る所なり。さて、斯くして、傳道されし黒住教は、凡そ幾人の信徒を有するか、同教本廳の語る所によれば、徹すべき統計材料の調査は、今着手なるを以て判然せずといへども、安政三年丙辰正月、赤木忠春が、京都にて大明神號出願の願文中には「門人十萬に餘り日々繁榮仕候云々」とあり、明治九年別派獨立出願の際調査したるものによれば、信徒人口三十二萬九千二百卅二人とあり、其後卅八年末に統計調査せしに、信徒三百九十四萬九千三百八十一人を算したりと。されど、これは所謂神文奉告者を積算したるものなりとの事なれば、今直ちに信仰衆圓の教徒なりと見做す可からざる者なり。其後、四十年更に信徒にして、其信仰を有し、誠務を誠

すものを標準として統計したるに、信徒戸数八萬三千七百餘、人口三十四萬三千三百餘ありたりといふ。之に對する教師の數七千百十人にして、教會所、説教所の數五百卅一なりといふ。素より以て正確なりと爲す能はざるも、又以て彼が威化勢力の大なるを知るべく、一人の力、此丈多數の人の中心たりとせば、此點のみよりも、宗忠の非凡を解す可からんか。

然れども、吾人若し立ち入りて、黒住教の主義なる者が、如何なる人によりて、如何なる人の間に擴布せられつゝあるかを精査したらんには、宗忠とても、強ち喜ばざるべく、本意なく思ふ事も少からざるべし。黒住教が、未だ多くの識者の間に、一宗教としての健全なる存在を認められず、社會の中堅者の間に一地歩を占めず、宗忠が、尚一迷信教々祖とのみ認められることと、殘念の事どもなり。吾人とても、彼をば、久しく好い加減の山師位に思ひたりき。然れど

も今日彼の思想を窺ひ、人物性格を察すれば、彼は確に多くの偉人中に一地歩を占むべきの價値ある人なるは疑ふ可からず。今の黒住教徒なる者、眞に奮發して、自からの德器を成就し、智能を啓發するなくんば、遂に獅子身中の蟲の譏を免れざらんか。彼を研究して、一片の苦言を呈しをく次第なり。

序ながら、沿革の重なるものを述ぶれば、同教は、明治五年大教院開設の際は、同院に附屬し、同八月廿二日、講義條目施行許可せられ、黒住講社と稱し、同六年二月には、神宮教會附屬となりしが、其後附屬を解かれて大教院に復屬せり。同九年十月廿三日には、別派を許されて黒住教派と稱す。十五年十一月六日黒住教と改稱し、十七年八月に管長制度となし、十八年八月には教規の認可を得。爾來、何等の變化なかりしが、昨四十年二月に至り、同教廳が、教師養成所を設立し、新進有爲の士を招俳して、學理の闡明を怠らず、

時勢進運に伴はんと努め來りしは吾人が同教の爲に慶せざるを得ざる所なり。又之と同時に同教が次第に、惰眠を覺醒し來りて、今四十一年二月十二日教規規則を改正して、眞個の文明的宗教の基礎を造らんと志し來りし、更に快なり。左に掲ぐるは、同教管長が、此改革につれて、同教教師信徒一同に與へたる告諭なり、採錄して、其勤勉努力せんと欲する意氣を示すの一助となす

我黒住教は教祖宗忠神忠神昇くも天命直受に依つて立て給ひし御教なれば吾等御教に遵ひて誠の道に入り人の人たる道即神になる道を修行せむとする者は夢にも教祖神の御教の筋に違ひ奉らざる樣心掛くべきは言ふまでもなし。

爾はあれど人各々御分心の働きあり時勢の推移に從ひて、物の考へ方にも異樣あり。顧みれば我教祖神の御時代を隔たる既に六十年星移り物變りて、社會の狀態も著しく改まりたれば、我黒住教

の本色も稍々動き、次第に教祖神の御教に遠さかる節々も見え、特に教祖神の說かせ給ひし事ども其の儘世に知られざるもの少からず、諸高弟達が厚き心もて書き傳へたる文歌なども多く世に知られず、時勢は種々なる制規を作る事を要求して獨り教義の上のみかは、教を布く上の定めも多く時俗に倣ふに至りしこそ、誠に痛嘆の極みなりけれ。宗子管長の職を享けて茲に十有四年つら〳〵此現狀を見て、本教の前途を思ひやれば我心一日も安からず、かくてあるべきにあらずと遂に意を決して、我教祖神の御事蹟を明かにせむとし、思を勞する事既に久しく、未だ其志の幾分をも達せざれども此間又諸子に告くるに足るものあり。且は荏苒歲月を閲みして職を瀆しうするの責一身に加はるを思ひ、愈々這度の改革を行ふに至れり、爰に諮みて諸子に告ぐ這度の改革は不肖一人の志にあらず、必ず前任管長達の志にも叶ひ、教祖神の御教の

大旨にも悖らざるべし。希くは教師信徒一般意を安んじ心を平かにして、次々に擧げ示す所の旨を領せられよ。

抑も這度改革の骨髄とも言ふべきは教規にあり。教規は凡て五十六條、第一條の規定は本教の大眼目なり。其天照大御神の大道と言ふ所以は弘化三年御定書第一條及び御書翰に於て所依あり。第三條に黒住教々團と云ふは道運團體の意を明かにしたるものにて、凡そ教祖神の御教を奉ずる者は吾れ人共に教祖神の御瀦留に從ひて謬らざる樣、御互に道運たるを念とすべきなればゆめゆめそかに見逃がすべからず。第六條に教師信徒の修行允可の條を擧げ第十五條に教師の稱號を改めたるは、教祖神御在世の時を仰ぎなつかしみて、其始に反らむ事を希ふの餘なり。又彼の大教會所内に本廳を置きたるは教を先にして、教務之に從ふの本意に出で、學校及び議會を設けたるは時勢の要求を充さむが爲めに外ならず。

其他の條項すべて大綱を擧げて誤なかるべし。

教則は第一號より第十二號に至るまで、教規全般の運用を規定せるものなれば始終教規の範圍を出でず。故に時に臨み變に應じて教則は之を變更する事あるべしと雖、教規は濫に改定すべきものには非ず。

要するに教師信徒一般は此教規教則に依りて　天照大御神の大道を履む道運の團體即ち教團の一人たる事を忘れず、各々其職業を以て天職なりと信するに至るべき修行を專一と心得教師は直接布教の任に當るべきものなれば最も人格の修養に重きを置き、社會上の地位に顧みて、敢て後れざらむ事を期すべく、信徒は家業を勵むの餘を以て教團の維持に力むべきものなれば、禁厥等の傳授を得たりとも愼みて其事を猥りにせざるを念とすべし。是れ寔に社會の秩序を正しくする所以にして、實に教祖神の御心なるべし。

懇望に堪へず。敢て告諭す。

明治四十一年二月　黒住教管長　黒住宗子

尚、同教の教育機關たる教師養成所の教授學科表を掲げて掲げをかん。

豫備科は高等小學校卒業以上の學力あるものを收容して、二年間修業せしむ

豫備科

	一年級（一週授業時間）	二年級（一週授業時間）
黒住教々祖ノ事蹟講話	二時間	二時間
倫理	一時間	一時間
國語漢文	八時間	八時間
歷史	日本歷史　四時間	世界歷史　三時間

地理	日本地理　二時間	世界地理　二時間
數學	算術　二時間	幾何代數　四時間
博物	植物學　一時間	動物鑛物　二時間
物理化學	二時間	二時間
法制經濟大意		二時間
生理衛生	一時間	
外國語（英語）	四時間	三時間
計	二拾七時間	二拾九時間

本科ハ、（一）豫備科卒業生、（二）官公私立高等女學校女子師範學校及官公私立中學校專常師範學校及官公私等以上の學力を有すると認めたるもの及入學試驗の上之と同及教師たりしもの、（三）現に同教の教師たるもの（四）判任官以上の待遇を有する官公吏たりしものを收容して左の如き學科を講授す修業年限は二ヶ年。

本科一年級（一週授業時間）二年級（一週授業時間）

黒住教々義	六時間	八時間
國史	三時間	日本古代史　三時間
世界史	二時間	宗教學及宗教史　三時間
國語漢文	四時間	哲學概論　二時間
倫理學	二時間	法令及教規　一時間
心理學	二時間	作文　二時間
論理學	一時間	諸祭式及禮法　二時間
社會學	二時間	／
計	二拾二時間	計　二拾一時間
隨意科外國語	三時間	隨意科外國語　三時間

研究科及別科もありて、前者は、官公私立專門學校以上の卒業者、

及び同教々師中の研究志望者を集め左の如き學科を授く

研究科（一週授業時間）		別科（一週授業時間）	
黒住教々義	拾二時間	黒住教々義	拾二時間
宗教學	二時間	國史	三時間
哲學史・	四時間	宗教學及宗教史	二時間
法令及教規	一時間	倫理學	一時間
諸祭式及禮法	二時間	法令及教規	三時間
／	／	作文	二時間
計	二拾一時間	計	二拾五時間

而して、教師には、文學士三名其他之に比適し、或は以上とも目せらるべき人々從事し居らるゝが如し。

* * * * * * * * * * * * * * *

夫れ黒住教や、斯くの如き運動を試みつゝあり。而して着實穩健な